



秘めたる蕾、啄むモノは……。

咲き急ぐ蕾 中村昭利視点 体験版

〜登場人物〜

中村 昭利 鬼瓦校に通っている。三組。サッカークラブ所属。最近スタメンなった。明日香とは昔から親しい付き合いだった。最近積極的になった彼女に好意を抱くようになっていくが、今一つ、積極的になれず、行動が遅い。

沢森 明日香 鬼瓦校に通っている。三組。昭利の幼馴染で、最近積極的になり始めている。しかし、昭利がまだ初心なせいでうまくいかず、それが不満。

志垣 隆 鬼瓦校の教員。三組の担任。比較的若い教員。昔は彼女が居た。

井沢 元治 鬼瓦校の養護教諭。人当たりが良く、親しみやすい。前の教諭が妊娠したために臨時で配属された。経験は浅いが熱心である。

坂田 広樹 鬼瓦校に通っている。三組。昭利の友人で、明日香に好意を抱いていた。

笠原 雄太 鬼瓦校に通っている。三組。昭利とよく一緒に居る。

1. 日常

四月も中盤に差し掛かったころ、山間の鬼瓦村にも遅い春がやってくる。桜はすでに散っているが、若葉が見えるにはしばらく時間がかりそう。まだ冬を思い出させる寒さがある。村立鬼瓦校のグラウンドも殺風景なままだ。

そんな景色を眺めながら、中村昭利はのんびりあくびをしていた。

「おーい、中村。あくびしてるんじゃないぞー」

教員の志垣隆が目ざとく指摘すると、昭利は慌てて手を隠し神妙に俯く。その仕草に軽く笑いが起きた。

「やーい、おこられてやんの」

前の方の席に座る沢森明日香がここぞとばかりに振り向いて小声で茶化す。

「うっせーな。お前こそ後向くな」

幼馴染の明日香にくすくす笑われるのは日常茶飯事。昭利は肩肘ついて黒板を向いた。

その日のホームルームは、公民館でのボランティアの手伝いを決めていた。

月末が近くなると、村の公民館では福祉の一環として村人を集めたレクリエーションが行われる。参加無料で昼から夕方まで工作やスポーツをして過ごすのだ。

インストラクターとして村役場の若い人や、鬼瓦校の教員などが参加する他、鬼瓦校の学生も保育の実習という名目で駆り出される。

「なんでせつかくの休みにガキの世話なんてしないといけないんだよ」

笠原雄太は机に肘を立ててつまらなそうにぼやく。雄太の家も共働きだが、これまでボランティアなど地域行事にほとんど参加していない。

世話になつていないのだから、逆に世話をするつもりもないらしい。

「そういう態度はよくないぞ」

「だって先生、無給でしょ？ ただ働きなんてやだよー」

もつともな意見だが、それは隆も一緒。一応、手当は付くが雀の涙でしかない。彼も責任者の一人として参加を余儀なくされており、地域奉仕として安く使われる予定なのだ。

「お弁当が出るぞ。街の方の仕出し弁当だから期待できるって聞いたなあ」

「どうせ白鳥屋でしょ。食い飽きたよ」

両親の帰りの遅い雄太は夜、お弁当宅配サービスを受けている。お弁当は美味しく色とりどりだけれど、頻繁に食べているからつまらないらしい。たまのお弁当持参の日などは他の子とおかずをとつかえっこしているほどだった。

「しょうがない奴だな」

笠原家の家庭事情を知る隆はそれ以上強く言わず、他の学生を見る。

「誰か立候補する人はいないか？」

こういう面倒な仕事はクラス委員に押し付けられがちだが、試験を控えているらしく、連休も試験対策講習があつてパスらしい。



「沢森さん、お願いできる?」

隆は教室を見渡して、話もそこそこに横を向いている明日香を指名する。

「あたしですか?」

名前を呼ばれたことで驚いて立ち上がる明日香。皆、その様子にげらげら笑い、彼女も恥ずかしくなって真っ赤になる。

明日香は父が単身赴任で母と二人暮らし。その母もパートに出ることが多く、寂しさと気晴らしで地域の活動によく参加していた。なのでこういう時に白羽の矢がたちやすい。

「沢森さんはよく参加してくれるから色々勝手がわかっていいかと思っただけど、無理かな?」

「えと、あたしは大丈夫ですけど……」

「そうか。じゃあ、男子いつも通り中村でいいか」

明日香が了解したことで隆は相方に昭利を指名する。

「え、俺っすか? やだよ。そろそろ試合近いしサッカー自主練するつもりだったのに」

昭利は慌てて拒否するが、周りは「沢森と一緒に良かったな」「昭利と明日香は夫婦だもんな」と囁し立てる。

「な、誰が、沢森みたいな男女なんかと! 大体ガキの世話なんてしたくねーよ」

「いいじゃん、将来の勉強だよ」

「なんの勉強だよ」

「子供の世話の勉強でしょ?」

「俺、保育士さんになるつもりないぞ」

「ちがくて、明日香ちゃんとの子供の世話の為」

「ちょ！」

「な！」

さらに加速するクラスメートの囁いたてる言葉に二人とも真っ赤になる。

「なんであたしがこんな奴の子供！ 嫌よ！」

「こつちだって願ひ下げだ！ 俺はもっとおしとやかな子がいい！」

「あ、その言い方だと、あたしがおしとやかじゃないってこと？」

「あつたりめーだろ？ お前、今年になって何回俺の事叩いたよ！」

「まだ10回でしょ！」

「普通は1回も叩かないっての！」

「あんたが馬鹿なことばかりするからでしょ！」

「俺だけじゃねーだろ！」

「でも悪いのはあんたじゃん！」

「なんだそれ！ とにかく、俺は！」

「とにかく、二人でいいな？」

昭利が言い返そうとしたところで隆がこほんと咳払いをする。

「二人とも、ホームルームで騒いだ罰として、しっかりと参加するように」

「……はい」

「……なんでこんなことに……」

有無言わせない隆の決定に二人はうなだれる……が、明日香は昭利に見えないよころで目をつむり、えくぼを作っていた。

「ふーん、明日香ちゃんと公民館のボランティアに行くの。じゃあデートね」

帰宅して母に公民館での予定を伝えると、笑いながらそう言われた。

「何がデートだよ。俺はそんなつもりないっての」

「あら、そうなの？ 明日香ちゃんのこと、嫌いだったっけ？」

「え……」

母、恵美は意外そうに口に手を当てて目を丸くしていた。

「別にそんなんじゃない……っていうか、明日香は俺にばっか乱暴だから」

「それは好意の裏返しよ。明日香ちゃん、昭利とお話するきっかけが欲しいからそうやってちょっかい出すの。好きな子には悪戯しちゃうっていう気持ちかしらね」

「ただ乱暴だけじゃん」

「うふふ。昔は昭利が明日香ちゃんにいじわるしてたじゃない」

「してないよ」

「バツタを見せたり、スカート捲ってみたり、木登りして上からかったり……」
保育所時代のことを懐かしそうに言う恵美に昭利は眉間に皺を寄せる。幼い頃の記憶を語られる恥かしさと、その続きが少々勝手の違うこと。

明日香にバツタを見せたら足をもがれて芋虫にされ、スカートを捲いたらそっちも見せるとパンツごとズボンが脱がされた。木登りしたら足を引っ張られて股間を思い切り枝にぶつけた。

どれもそれ以上のしかえしをされており、ちょっとした癩に障ったら叩かれてきた。

母の言う「好きだからちよつかい」にしては、少々度が過ぎていている気がした……が、実のところ、最近はどうでもない。

最近になって寒がりになったのかだぼだぼした服を着ることの多い明日香。手の代わりに悪口が増えたけれど、掃除を手伝ったり一緒に運動したり、サッカーの自主練を見られたり、委員会の仕事をした時は「ありがとう」「また練習付き合っつね」「サッカー頑張ってるね」「おつかれ」と笑顔で労ってくれる。

笑顔を見ていると照れくさくて正面を向けず、なんだかオシリが痒くなったり顔が熱くなる。風邪でも引いたのかとおでこを触る日々だった。

「明日香ちゃんと今は良い関係でも、うかうかしていられなくなるかもよ？」

「え……」

食器を拭く手を止めて真面目なトーンで言う恵美に昭利はどきりとする。

「そんなこと知らないよ。明日香みたいな男女、好きになる奴なんていないし……」

否定の言葉を並べるものの、なぜか焦りが募る。というか、自分が明日香に対して焦っているのだと思いはじめ、お腹の辺りがゆすぶられるような嫌な気持ちになる。

「そうかしら？ 明日香ちゃんを狙ってる子、居ると思うけど……」

「誰！！ あ……」

「うふふ。さあね？」

食いつく昭利を見て恵美は嘔き出してしまふ。そして肩を竦めると背を向けて残りの食器を片づけ始めた……。

「なんだよ、母さん」

夕食を終えて自室に戻った昭利は、机に脚を乗せ、椅子の背もたれに寄りかかっていた。腕を頭の後ろで組んで天井を見る。

頭の中にあるのは明日香のことばかり。

明日香は自分をどう思っていて、自分は明日香をどう思っていて、明日香を狙っている男が居て……。

自分と明日香。仲が良いかといえば、そうだと言い切れる。彼女とはよく話すし、グループ学習の時も提出物、レポートで面倒を見てもらい、スポーツの練習は自分が相手になってアドバイスをしている。

昔から夏祭り公民館での行事で顔を合わせる機会が多く、彼女の母が遅い時は中村家に泊めることもあった。お風呂も一緒に入り、ほくろの位置まで知っている関係だ。

「明日香が？ 誰かを……」

乱暴ですぐ人を叩くような明日香が他の誰かに気持ちを寄せている……。

そんなはずがない。

脳内で首を振って乾いた笑いでごまかすけれど、意味深な母の言葉が頭をよぎる。

最近はどうだろう？

意識したことはない……、いや、むしろ意識しないようにしている。

本当はだんだん女の子らしくなっている。

胸も大きくなってきているし、お尻も丸くなってきている。

それを意識してしまうと、なんだか胸がもやもやして急かされるような感じになり、ついでにズボンもきつくなる。

「明日香が……なあ……」

徐々に自分に起きている変化を認められない昭利だった……。

鬼瓦高原グラウンドでは怒声と歓声、激励が飛び交っていた。

一つのボールの行方を巡ってフィールドを駆け巡る22人の姿があった。

五月の連休に予定されている大会を前に、小規模な練習試合が行われていた。

昭利は鬼瓦FCに所属している。彼は今日も補欠だった。最近のがんばり具合と先輩の卒業でレギュラーの椅子が回るはずだったが、野球部から転向してきた石川琢磨にあっさりレギュラーの座を奪われてしまった。

一組の根暗な奴。サッカーを始めたのは、野球の丸刈りが嫌だからというナンパな理由。それだけならともかく、これ見よがしに幼馴染の荻原翼を応援に連れてきている。

ただでさえエースの吉川雄二が女の子を侍らせるといふナンパな雰囲気があるのに、さらに女づれの部員が入ってきてしまい、ヘイトが溜まるわ渦巻くわ……。

「そろそろだな。おい中村、体温めとけ」

そんな中、監督の戸田徳助が昭利に声をかける。

試合は前半ロスタイム。出場は後半から。

「はいー」

元氣よく返事をして、昭利はストレッチと軽い走り込みを始めた。

「12番アウト！ 16番イン」

昭利がフィールドに出る。交代は例のナンパ野郎。

「頑張れよ」

「……」

言われなくてもやってやる。

「ああ」

それでも激励の言葉を無視できず、ハイタッチでフィールドに出た。

試合は相手、相模原フットボールクラブが2点差でリードしている。負けたところでこれは練習試合。ただ、その試合内容が情けなくては相手を調子づかせる一方だ。

昭利はミッドフィルダー。ゴールを狙う立場ではない。積極的にフィールドを走り、ボールを上げていく。

途中出場だけに体力が温存されている。このまま一気に上がって行って、エースストライカーにパス……のはずが、雄二はマークを切れていない。

「……！」

オフフェンスはボールを待つのが仕事ではない。そういう積極さが見えない雄二がどうしても今もオフフェンスなのか？ 監督の采配がわからない。昭利はバスターゲットを探し、一旦ボールを下げる。

「なにやってんだ！ ボールあげろ！」

監督が檄を飛ばすけれど、がちがちにマークされている雄二にパスできるはずもない。昭利は再びフリーになってボールを受け取ると、今度は別のターゲットに出す。

源栄一。同じクラスでこれまた根暗で何を考えているかわからない。それでも古株で実力者だとわかっている。今もこっそり動いてマークを外していた。

昭利はフェイントを交えてボールを回す。彼は思った通りすぐにそれを受け、ゴールを指す……はずだった。

ボールを上げると、雄二が相手のディフェンスを引き連れてやってくる。せっかくのフリーな栄一の壁になるように出てしまい、シュートコースが狭まる。

相手が迫る。栄一は苦しい中、それでも果敢にゴールを狙う。

「あー……！」

カーブを描いて放たれるシュート。けれど無情にもゴールポストがそれを弾く。相手チームのゴールキックに変わり、再び圧され返す。

「何やってんだ！ 昭利！ ゲンチー！」

今のは明らかに自分達のせいではない。それでも昭利と栄一は「すみません！」と声を張り上げる。

「ごんまい。走ってけ、走ってけ」

フィールドの外から拓馬が上がるように腕を回して促す。

「……」

良い奴なのかもしれない。そう思う自分は単純なのかもしれない。

前半を終えて汗だくの昭利はディフェンスに下げられることになった。

先ほどのプレーに監督が怒ったらしい。

「俺が格好良く決めようとおもったんだけどな。あの馬鹿が全然ボールまわさないんだよ」
ベンチに戻った雄二はクラスメートの井上美優、菱沼佳代からタオル、スポーツドリンクを受け取って折り畳み椅子に座っていた。

色々不満があるけれど、言ったところで聞き入れる性格でもない。所詮はレギュラーと補欠なのだ。

「悪いな。さつき外して」

監督が席を外したのを見て、栄一がぽんと肩を叩く。

「しゃーねーよ。三枚も壁があっちゃ」

「二枚だ」

「……ふーん」

チームメイトを悪く言うのを嫌がったのだろうか、栄一はこういう話には乗ってこない。彼はタオルで顔を拭くと、スポーツドリンクを飲んでいた。

「あーあ、せっかく拓馬君の活躍見たかったのになあ」

「ん？ ああ。そう。それより、今日は野球良かったの？」

向こうでは拓馬と翼が話しているのが見えた。楽しそうに女の子と話しているところを見るとムカつとくる。どうしてそうなるのかはよくわからない。とにかくアイツもちやらい奴だと再認識させられた。

「うん。前に行ったし、今度は拓馬の番だよ」

「俺はレギュラーじゃないし、格好悪いところ見られたくないから来てほしくないな」

「そういういじわる言うんだ。っていうか、なんで野球やめちゃうのよ。続けてくれたら応援も楽なものになー」

女づれといっても何か複雑な事情がありそうな拓馬と翼。そういえば二人ではなく三人で居るのを何度か見た気がする。もう一人は誰だったろう。調子が良くて上っ面な印象があるのだが……。

昭利は額に垂れる汗を手で拭う。タオルを探そうと鞆を見るが、ハンドタオルが一枚あるだけだった。

「うえ、なんでこれだけなんだよ……」

確認せずに来てしまったらしく、これでは汗を拭うのに足りない。ついでにドリンクはお



茶。運動には適さない。せっかく試合に出られるのに、準備がガタガタだった。

「あれ、昭利じゃない。何してるの？ うわ、あせだく……きもーい」

鞆を前に頭を抱えていると、背後で明日香の声がした。振り返ると笑顔で手を振る彼女がやってくる。

「明日香……なんでここに居るんだよ」

「別に？ ただ通りがかっただけよ。それよりも汗びっしょりじゃない。タオルとかないの？」

「ハンドタオルだけ……」

「もう、試合ならちゃんと準備しとかないよだめでしょ？ はい、タオル」

彼女は鞆からタオルを取り出すと、押し付けるように投げて来た。

「なんで、持ってるの？」

「別に？ 普通必需品じゃないかしら？」

ハンカチならそうだろう。だが、タオルとなると少し違和感。

「はい、ジューズ」

そう言って渡してくれたのはビタミン、塩分チャージをうたう新発売のスポーツドリンク。

「いいの？」

「後で請求するよ。倍返しね」

「なんだよそれ……」

「当たり前じゃん。三倍返しって言わないだけイイコでしょ？」

「……」

ホワイトデーのダメだしを思い出しつつ、昭利はありがたくそれを受け取り、ごくごくと飲む。

「きんぎょ」

短く言い、タオルを投げ返す。

「あ、ちよつと、そういうのつて無いじゃない？ もう……」

昭利自身、そう思う。けれど、今の格好悪い姿を見られたくない。後半こそ頑張つて見せる。そうしたらありがとうと言いたい。ごめんとも言いたい。だから……。

*
*

母の日に備えて夕飯を作る大変さを知ろう。

鬼瓦校の標語であり、四月は必ず調理実習が行われる。

今回のテーマは肉じゃが。おふくろの味らしい。

「えと、じゃがいもを切るのか……」

昭利はジャガイモを洗うと、皮も剥かずに半分に切る。

「ちよつと昭利」

すると横から明日香が口を挟む。

「何考えてるのよ、もう……。切る前にちゃんと皮剥いてよね」

半分にされたジャガイモを手にとると包丁で皮をむく。その手つきはややぎこちなく、でこぼことなっていた。

「皮剥くんじゃねーのかよ」

結果を見る限り、一回りも二回りも小さくなっていったジャガイモに昭利はくくくと意趣返し。

「うっさいわね。誰かさんが変な形に切るから剥きにくかったのよ」

「そうか？ もともと下手なんじゃないの？」

「違うわよ。いつもはピーラーで剥いてるし、包丁が大きくて切れにくいから……」

「ごによごによと言いつつ訳をする明日香だが、その隣では佐原みなみがもう半分のジャガイモを綺麗に剥いていた。

「ふーん」

昭利は手際のない彼女の仕草を見ながら、明日香に薄ら笑いを向ける。

「うるさいわね。ふんだ、見てなさいよ。あたしが作った肉じゃが食べてびっくりすれば

いいんだから」

「すっげまづくてとか？」

「言ったな？ じゃあ昭利には食べさせないもん！」

「へーへー、そうですかー」

昭利はバカにした様子で白滝を水洗いしていた。

しばらくして良い匂いが実習室に漂い始める。

隣の班では坂田広樹が味見をしながら薄いと言っており、それを聞いた萩千夏が醤油をいれようとしてどぼどぼ……。

担任の志垣隆が慌てておたまで醤油を掬い、味を確かめていた。

「なんかいろいろ大変だな……」

その点、昭利の班はみなみがリードして明日香がサポートしている。昭利達外野は皿の準備ぐらいた。

明日香はジャガイモの皮むきこそ失敗したものの、手際の良さは昭利も知っている。単身赴任の父とパートに出ている母の代わりに料理を作っているだけあって、他の子よりずっと手際が良かった。

「うん。」

「うん、おいしい」

明日香の味付けにみなみが笑顔で答えた。

「ほら見なさいよ！ ミナミンも美味しいって言ってるわよ！」

「ふーん、お世辞じゃねーの？ とりあえず……っと」

「なに言ってるのよ。あんたはさつきすげーまじーって馬鹿にしたんでしょ？ 食べさせないからね」

「おいおいおい、そりゃねーよ。さっきの言葉のあやでして……」

「お、沢森さんの班も終わったのかな？ どれどれ……」

隆が見回りにやってきてお玉で一口味見する。

「うん、美味しいね。佐原さんも沢森さんも良いお嫁さんになれるよ」

笑顔で言う隆に明日香は柄にもなくきやつきやつはしゃいでいた。

「本当ですか！？ 嬉しいな〜」

「先生もこんな肉じゃがを作ってくれる人をお嫁さんにしたいよ」

「あーん、もう先生ったら上手なんだから〜。どうせみんなに言ってるくせに〜」

「そんなことないさ。沢森さんの料理を毎日食べられる旦那さんは羨ましいだろうね」

べったべたに明日香を褒める隆の態度。それを受けてくねくねと気持ち悪い仕草をする明日香。どちらを見ているもいらいらしてしまう。

「へん、なんだよ。どうせ佐原が味付け整えただけだろ」

そういうのを見ると返って反抗したくなる。そういう自分の中のガキ臭さが悪いところだと思っても、それでも目の前で行われるわざとらしい二人の態度が昭利の我慢を削っていた。

「あー、そういういじわる言うんだ……。ほんと昭利ってやな奴〜」

「そっちこそ！ 普通に俺にも味見させてくれればいいじゃん」

「謝ったらね」

「なにをだよ」

「最初に言ったこと」

「食べてみるまで味はわかんねーじゃん」

「みんな美味しいって言ってるもん」

「どうだかな。俺くってないし」

「謝ってくれなきゃたべさせないもん」

「食ってから」

「謝ってから」

互いににらみ合い、譲らない。

いつもながらに意地っ張りになってしまふ二人。昭利は誰か執り成しに入ってくれないかと他人に期待しつつ、それでも自分から折れるわけにいかず、意地を張る。それはきつと明日香も一緒。その内に肉じゃがはどんどん遠ざかっていく……。

「ん？ あれ？」

「え？ あ……」

すると甘い匂いが漂い出す。どこからだろうと鼻をひくつかせると、だんだんと焦げ臭くなる。

「焦げてる？ うそ、まさか……」

明日香は慌ててコンロの方を見る。いつの間にか湯が吹きだしており、ジャガイモや白滝が焦げていた。

「な……なんで！？ あつー！」

いつの間にか水分が飛んでいたらしく、ジャガイモやニンジンが焦げ付き始めていた。

「おいおい、なにしてるんだよ。さっさと火を消せよ」

昭利はコンロの火を止め、鍋掴みで蓋を取る。中には焦げ付き始めた惨めな肉じゃがの残骸があった。

「うそ、なんで……」

「……明日香」

せつかく作った肉じゃががめちゃくちゃになってしまったことに明日香はがっくり肩を落としていた。さすがに気の毒になった昭利は頭を掻き、自分から折れるように口を開く。

「すまん、俺が余計なこと言うから……。悪かったよ」

「……ひっぐ」

鼻をすする声に昭利は繕うように早口になる。

「な、その、明日香の肉じゃがは美味しいよ。まずいなんて嘘だつて。ちよつと強がっただけだつての」

「……じゃあ食べて」

「え？」

「これ、食べてよ……」

「だって、これ、焦げちゃってるじゃん……」

肉じゃがは焦げ付いており、苦い匂いが漂っていた。

「食べてよ……」

涙目になる明日香は皿に肉じゃががだったものを盛りつける。彼女としても本気で食べさせるつもりが無いのか、箸は出さず、ただそれを見つめていた。

「……うう」

昭利は橋をグーで握り、ジャガイモを突く。まだ食べられそうなところをつつき、一口食べる。

「……」

焦げ付いた臭いのせいか、やたらと苦い。昭利は難しい顔になり、二口目が食べれない。

「なんだ、どうしたんだ？ あー……、焦がしちゃったか……」

「はい……」

騒ぎを聞きつけて隆がやって来る。

「うーん、せっかく美味しくできたのに、残念だなあ……」

「昭利がすぐ食べないから……」

「そっか。うん、とりあえずこれはタッパーに移しておいて……」

「どうするんですか？」

「せっかく沢森さんが作ってくれたんだし、捨ててしまうのもね……。食べ物で遊んじゃいけないし、先生が責任をもつて食べるよ」

「そんなのダメです。お腹壊しちゃいます」

「大丈夫だよ。これぐらい」

隆は比較的まともな部分をタッパーに詰めると、そのままランチマットにくるむ。

「……先生……」

その様子に明日香は堪えていた涙をこぼし、実習室を出て行った。

「おい、明日香……」

「みんなは後片付けをしておいて。沢森さんのことは先生が見てくるから……」

昭利は追いかけてようとしたが、それより先に隆が教室を出ていってしまう。

「でも……」

「今、中村君が行ってもだめじゃない？ 明日香、すごく落ち込んでるし……」

追いかけてようとする昭利に目ざとく井上美優が口を挟む。他人のゴシップ大好きな彼女は、波乱含みの二人の様子に興味深々。

「うん、今は先生に任せておいて、あとでちゃんと謝った方がいいんじゃないかしら」

その隣では菱沼佳代が冷静な意見で昭利を制す。言い方ひとつで印象も変わるものだと思う、昭利は席に戻る。

周りでは肉じゃがを食べているのに、自分達は……。

「あーあ……」

やるせない昭利はせもたれに限界までもたれかかり、空腹を誤魔化していた。

「あのみ、中村君……」

すると隣の班から若竹武則がやってくる。

「あのみ、さっきのことだけど」

「うっさいな。ほっとけよ」

「そうじゃなくて」

「なにが違うんだよ」

「だから」

「はっぴりしろよ」

「……ごめん」

武則は何かを言いたそうに昭利を見ていたが、取りつく島もないと席に戻っていった。

武則にあたってもしようがないのに何をいらいらしているのか……。

昭利は明日香の他にも武則に後で謝ろうと考える。それまではしばらく不満を募らせていてもしょうがないと言いつつ謝をして……。

最近は色々裏目に出ている。

仲良くなれたと思うと踏み出す勇気が出ず、格好良く見せようとして失敗したり、変に片意地はって彼女の面目を潰したり……。

サッカーの時のタオルのこと、調理実習でのこと、どちらももしっかり謝れず、感謝もできずに過ぎていった。

朝、鬼瓦校へ行く時、二人は自然と待ち合わせをしている。そこへ行く足取りが重く、それでも彼女が待っているのを見ると、ほっとする。ただ、隣で歩く時も互いに下を向き、会話もほとんどできない。

せいぜい雨がどうの、宿題がどうの……。

まるで病院の待合室で交わされるような当たり障りのない会話に終始し、いつもより早足になってしまう。

ごめん。

べっぴんいいよ。

一言を告げたら彼女はそんな返事。

昭利をさらに憂鬱にさせた。

そんな日々を過ごす中、とある日の放課後に転機が訪れた。

その日の講義が終わると昭利は掃除もそこそこに、公民館の打ち合わせに行こうとしていた。

当然パートナーである明日香も一緒に行くのだが、姿が見えなかった。

「……」

鞆はロッカーにあるからまだ居る。彼女の掃除当番は体育館。

まだ掃除の途中なのかと思い、手伝いに行くことにした。それをきっかけに仲直りできるかもしれないと思い……。

*
*

体育館へ行くと、そこには誰も居なかった。

「……なんだ、居ないのか」

昭利は肩を竦めてきた道を引き返そうとした。

「……昭利？」

すると倉庫の方から声がした。

「明日香？」

「うん」

「なんだよ、倉庫？　なんでそんなところにいるんだよ。探したぞ……」

「ごめん。ゴミ箱を戻そうとしたらなんかドアが開かなくて……」

「ん？　たてつけが悪いのかな。離れてろ……」

昭利はドアを何度か蹴っ飛ばすが、開く様子が無い。他に道が無いだろうかと思い、倉庫の裏側に回る。すると下に通気口があった。ついたては錆びており、その向こうで明日香の姿が見えた。

「おい、待ってる。ここ壊すから」

「壊すって、先生呼んでくれば……」

「急ぐだろ。すぐだ」

「……うん、じゃあお願い」

明日香はちよつと逡巡したあと、頼んできた。きっと……。

「よいしょつと……」

がたがたと揺らしてネジを壊す。あとで新品のネジと交換しておけばいいと、昭利は衝立を力任せにはぎ取った。

「うわつと……」

そのまま転がり、フェンスにぶつかって止まった。

「……何やってんだ？　お前……」

フェンスの向こうでは隣のクラスの子が目を丸くしていた。

「いろいろあったんだよ。このことはナイショにしといてくれ」

「別にいいけどよ」

誰だろう。覚えていない。チビ同士でよくつるんでる奴の一人だった気がするが名前が出てこない。

「……！ 大丈夫？ 昭利」

「へーきへーき、それよりさつきとトイレ行って来いよ」

「な、別にあたしは」

「じゃあ、先生でも呼んでこいよ」

デリカシーの無い言葉を言い換えると、ようやく明日香は目的の場所へと走って行った。どれだけ我慢していたのだろうかを予想するのは野暮な話だった。

「ふう。とにかくなやっつてんだかな……」

昭利は衝立を元の場所に押し込むと、適当に釘を刺してその場しのぎをしておいた……。

「……ありがとう」

教室へ行くと、明日香が居た。彼女は鞆を手に、昭利が戻って来るのを待っていた。

「とろくせーな。ふふ」

「うっさいな。でも、正直困ってたの。だって気付いたら誰も居ないんだもん」

「ふーん。変だな。鍵もしまってたし」

「そうだった？ うーん、どうしてだろ」

「誰か鍵閉めたのか？ まさかなあ……」

「わかんない。でも、同じ班の子はもう帰ってたし……」

倉庫に閉じ込められていたらしい明日香に昭利は憤慨していた。眉間に皺を寄せ、誰が閉じ込めたのだろうと班員を調べ出す。

「やめなよ、昭利。もう出れたんだし、いいよ」

「そうだけだよ、やっぱりなんかあったら問題だし……」

「うん」

「……」

するとそこへクラスメートの子がやって来る。教室の外から明日香を見ると引き返すのが見えた。

「あいっ……」

昭利は瞬時に走って人影を追いかけた。

「昭利！」

明日香もそれを追いかけるが、人影はすぐそばで捕まえられていた。

「お前が明日香を閉じ込めたのか？」

「違うよ。僕じゃない。僕は鍵を借りて来たんだ」

「若竹君？」

昭利が捕まえたのは武則だった。彼は手に体育館倉庫の予備の鍵を持っていた。そのせいで一気に怪しさが増す。

「じゃあそれはなんだ？ お前が閉じ込めたからだろ？」

「違うよ。僕じゃないよ。僕は沢森さんが倉庫に入るのを見てたんだ。掃除が終わって帰ろうとしたのに沢森さんの鞆があったから、もしかしてっと思って、鍵を持ってきてたんだ。でも、さっき行ったら居なかったから、確かめに来ただけで……」

「そんなの信じられるかよ。明日香見て逃げたじゃないか」

「だって、二人が居て、邪魔かって思って」

「邪魔って……」

その言葉に昭利と明日香は真っ赤になってしまう。

「とにかく、僕はそんなつもりじゃないよ。信じてほしい」

「……」

武則はクラスでも目立たない大人しい子。明日香や昭利にも普通に挨拶をしていたし、恨まれる要素も無い。そんな彼が特別に意地悪をするかといえば信じがたい。

「本当だろうな」

「本当だよ。ただ……」

この思わせぶりなしゃべり方が鬱陶しい。それが彼の周りから人を離れさせるのかもしれない。

「なんだよ」

「館脇先生に聞いたんだけど、予備しかないって言われて」

「予備？ ああ、ほんとだ……」

武則が持っているのはあまり使われていないのか、きれいな予備の鍵だった。

「誰かが鍵を持ち出したんじゃないかって言ってる……」

「……そいつが犯人だっていうのか？」

「うん。多分」

「お前が二つ持ってるのかないよな」

「ないよ。鍵のことなら館脇先生にも聞いてみるといいよ。そうすれば僕の潔白も証明できる。ああ、そっか。もう一つのカギを僕が持ったらそうならないか……」

武則は自分で言っただけで自分を疑うようなことを言い出した。疑いは五分五分。はっきりしない武則らしい状況だった。

「わかったよ。信じてやるよ。っっていうか、なんでお前、あんなところに居たんだ。お前、

同じ班だっけ？」

「違うよ。でも、満君がさぼったから、仕方なく僕が代わりに手伝ったんだ」

「ああ、そういう……」

錦織満は三組の嫌われ者。親が工場を経営していて村でも権力者として通っている。そんな彼は親の権力・金にものを言わせて横柄な態度を取っていた。といっても、チビでデブで眼鏡でスケベな彼は冷ややかな目で見られることが多く、ほとんど相手にされてない。せいぜい武則ぐらいいがかいがいしく世話をしている程度だ。

「そうか。うん、そっか」

一応の筋が通っているので昭利もようやく納得し、彼を放してやる。

「疑って悪かったよ」

「僕こそ変なことしてたから……。あ、そうだ……」

何かを思い出したように昭利を見る。

「この前の肉じゃがの事なんだけど……」

「そうだった。明日香、ごめん。俺、ほんと変に意地張ってた。明日香の料理の腕前は俺も知ってるよ。いつも手伝ってるもん。からかって本当に悪かった」

「こそどばかりに昭利は明日香に謝り始める。」

「え、あ、うん。うん。そっか。うん。いいよ。許してあげる」

明日香は唐突な謝罪に「瞬驚き、すぐに笑っていた。」

「ふふ、気にしてもんね。ずっと」

「だってよ、俺だって……。さ。悪かったって思ってるんだよ」

「……………僕、鍵返してくるね。それじゃ」

緊張の糸が切れたのか、二人はいつもの様子で笑い合う。それを外から見つめる武則は遮られた言葉を続けるべきかどうか判断に迷い、最初の通り、邪魔だと思っその場を去ることを選んだ。

「ん？ ああ、うん、悪かったな」

仲直りのきっかけを与えてくれた武則に感謝の気持ちすらある。ついでに空気呼んでどこかへ行ってくれたことにも……。

「ま、昭利はおこちゃまですからね、嫉妬したんでしょ」

「だーれが！ つたく、すぐ調子に乗るんだからなあ、明日香は……」

「あー、言ったな！」

「そっちこそー！」

「……………」

「……………ふふ」

「……………はは、あーおっかし」

二人はけらけら笑い合うと、ようやく並んで教室に入れた。さすがに手を繋ぐことまではできないけれど……。

2. 理科の実験

金曜日の午後、理科室でのグループ授業のことだった。

実験の内容はビーカーで水を温めて、食塩水が溶ける量を調べ、過飽和状態からの再結晶化を行うというもの。簡単なものではあるが、火を扱うので緊張が見えた。

「ガスバーナーの使い方は家のコンロとは違うから気を付けて。始める前に手順を確認して、火事にならないように。実験が終わらなかつた班は理科室の掃除の後に居残りだぞ」
隆の言葉にみんな口々に返事をする。

昭利は手順を確認し、ガスバーナーの準備をする。まずは空気を供給するノズルを回してガスを出す。そしてマッチに火を付けて近づける。青い炎の三角形が確認できたら空気とガスの供給を止めて火を消し、次の人へ……。

「よし……できた。次は吉村さんか。はいどうぞ」

最初は緊張していたものの、手順を確認しながら難なくこなし、次の人へ渡す。

「昭利にもできるぐらい簡単じゃない」

隣の班の明日香は手に腰を当て、あっけらかんとした様子で言う。

今日の彼女はフード付きのパーカーとスカートだった。最近は大ぶだぶした服装ばかりだったけれど、いつになく露出の多い恰好だった。

「そういつて火事になつたりな」

「あー、言ったな？ あたしだつてこれぐらいできますよーだ！」

明日香は猫のような瞳を大きく開き、昭利にくつつかかる。お互い額が付きそうぐらいになるまで顔を近づけてむむむと唸る。

「これぐらい簡単、かんたん……」

ガスバーナーとマッチを手に操作しようとする明日香。すると空気のネジを回し過ぎてしまったのか、ころころと転がつてしまう。

「おいおい、普通外すかよ」

その様子に昭利含め、皆笑つてしまう。

「うっさいなあ。仕方ないでしょ。えと、どっちにいったかしら……」

「落したの？ すぐ探さないよ」

転がつたネジに気付いた隆は慌ててやってきて床を見て回る。

「沢森さん、どっちのほうに行つたか覚えてるかい？」

「えと、それが早くって慌てて分からないです」

「なんだ、だらしねーな」

「あのねえ、あんたが余計なこと言うからでしょ？」

「俺のせいだよ」

床に落ちたネジを拾おうと四つん這いになる明日香。昭利はばかばかしいとふて腐れる。

「こっちに無いなあ。そっちはどうだ？」

向こうでは隆が這いつくばって探していた。彼はズボンに埃がつくのも気にせず、床を舐めるように探す。

「先生、すみません、あたしのドジで」

「気にしないでいいよ。実験に失敗はつきものだから」

「次から気を付けます。一緒に探してくれてありがとうございます。どっかの誰かさんと違って優しいな〜せんせいは……」

あてつけがましく言う明日香に昭利はいらいらした様子で探すのを手伝うことにする。

「つたく、しゃーねーな、俺も探すよ」

昭利が机の下にもぐって探すと、目の前には明日香のおしりがあった。

「……！」

短めのスカートから彼女の健康的な脚が付け根から見え、動く度に奥がかすかに見える。最初よくわからなかったが、ピンク色のストライプ模様の布地だった。



それが明日香のパンティだとわかったとき、昭利はさっと目を外し、立ち上がろうとしてしまう。

「して……」

自分が机の下に居たことを忘れており、思い切り頭をぶつけてしまう。

「何してるの？ うふふ、ドジね」

明日香はそんな昭利を笑いながら見ていたが、元はといえば自分のせいということもあり、ぶつけた部分を擦ろうと手を伸ばす。

「……い、い、いよ、これぐら……」

「強がっちゃって」

「平気だつての。それより、あつた？」

明日香に背を向けて探し始める昭利。ぶっきらぼうに言うのは、彼女が手を伸ばした時、たるんだパーカーの隙間から膨らみ始めた彼女のおっぱいが見えそうだったから……。

*
*

「よし、それじゃあビーカーに水入れて、100CC？ で、それから塩を40グラムくらい？」

ガスバーナーに火を付け、水に塩を溶かす昭利達。順当に実験が進んでいった。

過飽和状態の食塩水に糸を入れた時、急速に塩が結晶化した時は、理屈でわかっているにもかかわらず実際に目にして驚いてしまう。

「ふう、これで居残りは免れたか……」

実験のノートに記録をしつつ、昭利は居残り免除にほっとしていた。簡単な手順なのでよほどのことがなければ居残りも無いわけだが、隣の班の様子が芳しくない。

マッチに火を付けようとしたら折れてしまい、水溶液を零したり食塩を落してしまったり……。

絵に描いたように失敗をしており、雄太がうざったそうに愚痴をこぼしていた。

「めんなさい……」

ドジでとろい堤下聡志は涙目になりながら、水で濡れた実験ノートに字を書こうとして破いていた。

「あーあ、つたくよお……。先生、ちょっといいですかー」

「ん？ どうした」

雄太はいい加減うんざりし、隆に向かってフォローを求める。

「どうしたんだ、いったいこれは……」

その惨状を前に呆気に取られていた。

「うーん、これはまた……。まいったな」

チャイムまであと15分程度。これからやり直すには時間が足りない。本来なら余裕をも

って片付けになる計算だ。現に他の班は片づけを終えている。だが、残念なことに聡志の班はまだ半分程度しか終わっていない。

「そろそろ授業が終わるし、一旦片づけをしよう」

「もしかして居残りですか……」

「うーん。そうだなあ……」

居残りを宣言した手前もあり、隆は渋い顔で頷く。

「ええ……」

雄太もうんざりした様子で呻いていた。

「先生も手伝うから、そうしたらすぐ終わるさ」

「はい……」

「居残りか。なんだか大変だな」

どう声を掛けた物かと悩みつつ、昭利は腕組みしながらやってくる。

「うーん。そうね。でも、あたしもバーナー落しちゃったし、人のこと言えないかな」

「そういやそうか」

「と、いうわけだから、あんたも掃除手伝ってよね」

「なんでそうなるんだよ」

「当たり前でしょ？ あんたが余計なことを言うからあたしが落して、聡志君も注意散漫になつて失敗したのよ。だから、居残りがすぐ終わるようにあんたも手伝うの。わかる？」

「わかんねーよ。つたく……」

「いいじゃん、暇なんだし」

「しゃーねーな」

昭利は頭を掻きながらも頷いた。

「あら、いいの？」

「お前が言ったんだらうが」

「そうだけど、ありがとね」

明日香はにこりと笑顔になると、昭利の頭をよしよしと撫でる。

「なんだ、中村も手伝ってくれるのか？ 先生嬉しいぞ、中村が優しい奴だなあ」

その様子を見ていたのか、隆が笑顔で昭利の頭を撫でる。

「ほんと、昭利はやさしいでちゅね〜」

二人にからかわれる格好の昭利は面白くなく、ぶーぶー文句をこぼしていた。

帰りのホームルームを終えた後、昭利は理科室の掃除を手伝っていた。

理科の実験を終える為にもまず理科室の掃除を終わらせる必要がある。おしゃべりをしながら適当に掃除する子に混じり、昭利はてきぱきと仕事をこなしていた。

「おーおー、感心感心。良い仕事してますねー」
のんきなことを言う雄太を睨み、椅子を下ろすように顎で示す。

「お前も早く終わらせないと帰れないぞ」

「そうなんだけど、でもまあ、家帰ってもなあ」

両親の遅い雄太は早く帰ったところで出迎えてくれる人も居らず、一人で過ごすことになる。なら、いつそのこと居残りをして友達と一緒に遊んでいる方が楽しいと割り切っていた。
「ったく……」

そういう複雑な家庭環境を知る昭利はあまり強く言えず、掃除を進めていた……。

*
*

「さて、それじゃあ実験の続きだ」

理科室で待っていると隆がやって来る。彼は食塩の他にポットを持っていた。

「なんです？ それ」

「うん。ポットにお湯を入れて持ってきたんだよ。今からお湯を沸かす時間をもつたいないからね。ポットの中もお湯は冷めちゃうから、先に100度のお湯から作ってくれ」

「ああ、そういう……」

実験の内容自体は温度における食塩の溶ける量を調べること。ガスバーナー自体は使わなくても良かった。

「そつか。じゃあ、順番にビーカーで温度の奴を作っていけばいいんだ」

明日香は理解したらしく、ポットを受け取り、ビーカーに注ぐ。

「志垣先生、来週の公民館のことなんですが」

理科室のドアが開き、舘脇真一がやって来た。40代後半に差し掛かる彼は生真面目で頑固。それでも理不尽な怒り方をするわけがなく、怖いけれど嫌われてはいなかった。

「はい、ええと、何かありましたか？」

「参加者の名簿ができたので、確認をしておらおうと思ひまして。向こうにもファックスを送るので、早いうちに……」

「ああ、はい、そう言うことでしたら……。ちよつと先生、席外すけど、大丈夫だよな？」

「はい、わかりました」

「それじゃ行きましょう」

「いいのかい？ 実験の途中みたいだけど」

「はい、塩とお湯しか使わないので、大丈夫だよな？ 沢森さん」

「はい、任せてください」

明日香はどんと胸を張って隆を見送った……。

「えと、40グラム、36グラムと……」

落ち着いた聡志は順番にノートに記録をしていた。

自分のせいで雄太と明日香を居残りさせた手前、いつも以上に張り切っていて昭利の出る幕は無かった。

「……ね、あのさ」

「ん？」

手持無沙汰な明日香は昭利の方を見ながら小声で話しかけてくる。

「なんか志垣先生、変じゃないかな？」

「そうか？ 別に気にならないけどなあ」

「なんかよく話しかけてくるっていうか」

「明日香に？」

「よく話しかけてくるような気がして」

「ふーん……そうだったかなあ……」

冴えない眼鏡の担任教師を思い浮かべてみるも、特にそういう気はしない……でもない。確かに思い当たることがある。

昭利が一人でいる時は特に話しかけてこないのだが、明日香と一緒にいると話しかけてくる。まるで自分はずいずいのように、明日香が話の中心になることが多い。

その内容も昭利が明日香を笑って反撃を喰らったところを見計らって褒める感じ。その都度、明日香は「大人な先生、ガキな昭利」という言い方をするので癪にさわっていた。

その他にもよく思い出すとおしゃべり好きな井上美優、世話好きでおっとりした佐原みなみなど……。逆に萩千夏のような子と話しているところはあまり見かけない。

それは席順にも見られる気がする。

明日香や美優、みなみは前で、他の子は後ろの方。中には目が悪くて困る人もいる……。考えてみて何か違いがあるのだろうかと首を傾げてしまう。

「なんか嫌なこと言われたりした？」

「そういうのは無いけど、昭利はどう思う？」

「俺？ 俺は……」

なんでもかんでも明日香におべっかを使っているようで、それがいら立つ。それは嫉妬なのかもしれないと思うと、さらに言えなくなる。

「別に……」

「そっか。うーん、あたしの考え過ぎかな……」

「そうだよ。だいたい先生が本気明日香のことなんか褒めないっての。冗談だよ、冗談」

「あー、言ったな！ もう、昭利ってどうしてそんなにじわるばかり言うの？ もっと先生みたいに女の子に優しく……」

「あれ、足りない」

「え？ どうしたの？」

聡がポットを抱えていた。その様子からわかる通り、お湯が足りなくなったのだ。

「少ないな。どうしよ」

ポットを振って中身を確かめる雄太。明日香も困り顔になる。

もう一度お湯を沸かしてもらおうにも、隆は先ほど呼ばれて職員室へ行ってしまった。

「これ使えるんじゃない？」

あと少しで終わるのもあり、目の前にはアルコールランプがあった。昭利はこれなら使えるだろうと手に取る。

「お、いいじゃんいいじゃん」

「え、使うの？ 先生いないのに……」

根が真面目な聡志は困った顔をするが、掃除まで手伝ってくれた昭利に強く反論できない。雄太もイタズラ心からなのか、マッチを使うことにワクワクしているようだった。

「うーん、仕方ないんじゃない。ちよつとだけだし、すぐ消せば……」

明日香も昭利の案に賛成らしく、聡志は黙りこくる。

「それじゃ火をつけるか。えと、マッチマッチ……」

昭利はマッチを探すが見当たらない。悪戯防止の為にしっかりと隠されていた。

それでもあきらめきれない昭利達はマッチを探して理科室をうろろする。

「無いな……」

「じゃあ、昭利は第二理科室の方探してくれよ」

「第二まで行くの？ 仕方ねーな」

昭利は一階下の第二理科室へ行こうと教室を出る。

廊下に出るともう外は西日が射しこむ頃だった。グラウンドでは学生達がサッカーをしていたり、下校するのが見えた。

昭利も急ぎ理科室へ忍び込むと、マッチを手にする。

「なんだ、もう下校時刻だよ。まだ残っていたのか」

するとタイミングが悪いことに向こうからメンドクサイことで嫌われている岩村勝行がやってきて言う。

「ん？ なんだ、それ。マッチじゃないか」

勝行は昭利の手にあるマッチを見て眉間に皺を寄せる。

「あ、あの、これは違うんです。えと、理科の実験で使うんで」

「何を言ってるんだ。こんな時間に実験なんてするのか？ とにかくマッチを渡しなさい」

「はい……」

頭ごなしに叱る勝行に掴まってはマッチを渡すまで帰れない。仕方なく渡すも、彼のお説教は続くようだ。

「こんな時間にマッチを持ってうろつくなんて危ないじゃないか。志垣先生にも話を聞かないといけないな。ちよつと職員室まで来い」

「……はじ」

お説教モードの勝行は厳しいだけだ。きっと今日も学級崩壊を起こして、その憂さ晴らしなのだろうと予想できる。

十

「あらら、昭利の奴、掴まっちゃったな」

物陰から昭利が勝行に連れていかれるのを見て、雄太は慌てて身を隠す。一緒になって怒られるのは御免とそろりそろりと階段を上った。

「……でもどうすつか。実験」

不真面目な雄太だが、中途半端にして投げ出すのも気が退ける。せっかく明日香も一緒に居るのだから、何か楽しいことがないかと期待もしてしまう。

「……」

ふと気づく。今は邪魔な昭利が居ないことに……。

「よし……」

雄太は一路、理科室へ急ぐと聡志に手を振る。

「おーい、聡志、まいったよ。昭利が捕まった」

「え？ 捕まったって一体なにしたの？」

聡志も明日香も驚いて雄太の方を見る。

「それがどうもこうもさ……、マッチ探しに行つて、岩村に見つかっちゃったんだよ。あいつうるさいからさ……。それで、なんでマッチなんて持つてるんだって感じになって、理科の実験なんだって言っても信じてくれねーんだよ」

「それじゃあなんであんなだけ戻ってくるのよ。あんたがちゃんと説明すればいいじゃないのよ」

一人戻つて来た雄太を明日香はじろりと睨む。

「岩村が聞くか？ 俺も慌ててたし……。こういうのは真面目そうな奴が言わないと信用されないかなって思つて……」

ちらりと聡志を見ると、彼は思いつめたように眉間に皺を寄せて俯いていた。聡志のミスのせいで居残りにつきあわせたことの負い目で彼を責める。

「そうだな。じゃあ、俺、もう一度行つて説明してくつかな」

「僕が行くよ」

「待つてよ、聡志君一人じゃ……」

思惑通り、罪悪感を抱いた聡志は明日香が何か言う前に飛び出していった。

「心配だしあたしも行かなきゃ」

「皆で行ったら誰が実験やるんだよ。それにせっかくのお湯が冷めるぜ」

「そうだけど、でも……」

「それに怒られて帰ってくる昭利がさらに居残りじゃかわいいそうじゃん。さっさと実験終わらせて帰ろうぜ」

雄太の意見にも一理あり、無理やり付き合わせたこともあり、明日香も言葉を飲む。きつといつもなら校庭で皆とサッカーをしているか、ゲームをしているはずなのに、つまらない実験どころか怒られたり……。

「そうだね。早く終わらせないと……」

明日香はノートを見つめ、30度程度のお湯を眺めていた……。

「おいおい、先生はそこまでしろなんていつてないぞ。お湯が足りないなら言ってくれたらよかったのに」

職員室にいた隆は勝行からマッチの件を聞いて驚いていた。

「すみません、岩村先生。僕が目を離したばかりに……」

「すみません」

昭利も項垂れて謝ると、勝行もそれ以上責められず、つまらなそうに口をへの字に曲げる。「繰り返し聞くが、本当に中村君は火遊びするつもりでマッチを探していたのではないんだな」

「はい。実験で使おうと思ったからです」

「志垣先生、生徒の指導はしっかりお願いしますよ。目を離して理科室が全焼したら大変です」

勝行は険しい顔のまま自分の席へと戻って行った。

「うん。それじゃあ僕も戻ろうか。元はといえば僕が目を離していたのが原因だ」

隆は立ち上がると昭利を促す。

「それじゃあ先生、失礼します」

昭利は勝行に辞儀をしてから職員室を出るが、案の定、無視されていた。

「実験の方は終わりそうだったかい？」

「はい。ただ、ちよっと無駄にお湯を使い過ぎたせいで……」

「そっか。でも無茶する必要はないよ」

「でも、聡志がかなり落ち込んでるっていうか……」

お湯が足りないことがわかった時の聡志の様子を思い出すと少々難がある。それは隆も気にしていたらしく、少し腕組みをしていた。

自分の失態で級友を居残りさせ、あまつさえ、遅れ、怒られるようなことになれば聡志の罪悪感も重くなる一方だろう。それを少しでも軽くするには、事前にフオローをするべきと思いつく。

「そうだな。じゃあ、戻る前に給湯器のお湯を少しもらっておこう」

隆は早速、宿直室へ行き、ガスの元栓を捻る。

「へえ、こうやって使うんですか」

一世代前のガス給湯器を眺め、昭利はへえと間抜けな感想を漏らしていた。

「これぐらいあればいいかな」

紙コップになみなみとお湯を入れる。

「あちち！ あちち！」

すると不意の熱さで思わず紙コップを落してしまう。

「あちち！ やべ！ 水みずず！」

ズボンにかかったお湯に驚き、慌てて水を掛ける。さらに床に水がまかれ、昭利の服もびしょびしょ……。

「ごめん。雑巾をもってくる。ああ、ついでにタオルもか……。火傷は大丈夫か？」

「大丈夫です。よく考えたらそんなに熱くないっぼいし……」

「そう。でも、タオル無いとまずいね。保健室行ってくるよ」

「俺も……」

「その恰好でうろつくと濡らしたように思われるし、大人しくしてたほうがいいぞ」

「あ」

言われて気付く。しっかりと濡れてしまったズボンの前に……。

「ふう、待ったかい？」

十分ほどして、少し汗をかきながら隆がやって来る。保健室から往復する程度なのにやけに時間が掛かったので昭利は不思議に思っていた。

その理由は背後に居る聡志に理由がありそうだった。彼は少し涙ぐんでおり、何か言いたそうに昭利を見ていた。

「なんだよ、どうかしたのか？」

「ごめんなさい。僕のせいで中村君が怒られて……」

「なんだよ。ちげーよ。マッチの件はお前反対してたじゃん。俺が勝手にやったことなんだから気にするなよ」

「でも、元はといえば僕がとろいから実験が遅れて……」

「そういうのはしゃーないよ。次ガンバレって」

「……………うん」

慰めてもまた涙ぐみそうな聡志に手を焼きつつ、昭利はタオルを受け取り、ズボンを拭き、腰に巻く。

「これでごまかせるかな」

「まあ、無いよりはいいんじゃないかな」

情けないかっこうに昭利はむっとしてしまう。

「ああ、それより実験のほうは……」

「うん。僕が見に行くから、もう少し拭いたほうがいいよ。あと、保健室にタオルを返しに行ってくれるかな」

「はい」

昭利は頷くとタオルでズボンを拭く。

「……」

聡志は涙を拭き、別のタオルを貸してくれた。

「お、ありがとう」

「うん」

これ以上泣かれても面倒と、昭利は下手に刺激せず、しばらく待ってから保健室へ行こうと思った……。

保健室へ行こうと部屋を出る二人。ズボンは濡れた染みが目立つけれど、外も暗くなっておかげで見えにくい。ついでに聡志が前を歩くことでカモフラージュした。

「それじゃあ行くよ」

「ああ。誰か居たら俺、お前の後ろに隠れるからな」

「うん。任せて」

胸を張る聡志におかしな頼もしさを覚えつつ、二人は保健室へと向かう。

途中、見回っていた真一に不思議がられつつ「タオルを保健室に戻しに行く」と聡志が言うと、彼は素直に信じてくれた。こういうところが真面目な子の特権なのかもしれないと感心してしまう。

「失礼します」

「はい、どうぞ」

保健室では養護教諭の井沢元治が居た。若い男の先生で気さくで生徒に人気がある。少し頼りない印象もあるけれど、そのおかげで安心して話せる人だった。

「タオル、ありがとうございます」

「ああ、うん。ズボンが濡れちゃったんだって？ 災難だったね。ブリーフのほうは大丈夫？ 一応、予備があるけど」

元治はまだ封の切られていないお徳用パックを取りだし尋ねてくる。

「大丈夫です」

そろそろ乾いていたこともあり、もう帰るのだからと断った。

「それじゃ失礼します。タオルありがとうございました」

「うん。気を付けて」

元治はタオルを受け取ると洗濯用のバックに入れた。

「さて、そんじゃ帰るか」

「うん」

ひとまず用事を終えたところでもう外は暗くなっていた。校庭ではもう帰り支度をする生徒しかいない。自分達もそろそろ帰らないと怒られると、教室に戻ろうとした。

「……」

「……実験」

「……あ」

そして実験のことを思い出し、速足になる。

「やば。みんな終わったかな」

「だね。急がないと」

昭利は全く関係無いが、乗り掛かった舟と最期まで見届けようと理科室を目指した。

「あれ……電気……」

教室を見ると電気が消えており、実験器具も無い。あるのは聡志のノートと筆記用具だけだった。

「終わったのかな。先に帰ったとか？」

「たく、待ってるよ」

無理やり付き合わせておきながらそれはないと憤慨しつつ、どしどしと教室に戻ることにした。

「……あれ？」

帰り支度を行って気付く。聡志の鞆と同じく二人の鞆もある。まだ帰っていないようだった。

「なんだよ、まだ帰ってないのか。どこ行ったんだろ……」

時間も時間なので心配になり、昭利は教室を出ようとした。

「わ」

「きゃー！」

出ようとしたら目の前に明日香が現れた。思わずつんのめり、彼女に倒れ込んでしまう。

「わわっと……」

顔から明日香に倒れ込むと、服の感触の裏に程よい反発を持つ弾力を感じた。

つんとした臭いが鼻につく。明日香の汗の匂いだろうか？ よく見ると服が水で濡れたよ

うな染みが見えた。どさっとした感触もそのせいだろう。

汗でしっとりとした冷たいかんじだけれど、肌の温かさがある。すごく熱い。しばらく走り終えた後みたいになどキドキしているのが伝わってくる。

「ごめんごめん……」

しばらくそのままでもいい気持ちをおさえ、手を伸ばして姿勢を戻す。

「……」

手に触れる温かくて張りのある弾力。少しやわらかく、手の平にちよんとした突起の感触があった。

「あ……」

顔を上げて気付いた。今、昭利の右手は明日香の右の胸を鷲掴みしていた。

「……んっ……」

少し苦しそうに呻き、肩を震わせる明日香。

「ごめん！ わざとじゃないんだ！！」

慌てて離れて、そのまま尻餅をついてしまう昭利。

「ぶ、なにそれ。だっさ……」

くすくす笑いながらしゃがみ込む明日香は、あまりの昭利の情けなさに怒る気が逸れたのだろうか。

「なんだよ、お前が急に飛び出してくるから……。ていうか、どこ行ってたんだよ。心配したんだぞ」

「そっちこそどっかいってたの？ 実験さぼってたさ」

「さぼってた……。おれは元々関係ないだろ？ それより実験終わったのかよ」

明日香が話を逸らしてくるので昭利もそれに乗る。それでも気持ちが高まってしまう。すぐそばでくすくす笑う高い声が妙に耳障り。彼女のいつもと違う汗のような臭いを嗅いでいると、もやもやする。何か嫌な気持ちになる。

臭いが気になるといえば体育の後や掃除の後などに明日香が引っ付いてくることがあるのだが、その時ですら感じたことがない。

「ほら、立って立って」

「いよ、別に」

手を伸ばす明日香に昭利は顔を背ける。だが、明日香は強引に手を取り立たせる。

「あ……」

昭利はズボンを慌てて隠す。

「ちょっと、どうしたの？」

「いや、これは、その……」

今、明日香に見られるわけにはいかない。何を言われるかわからないから……。

「中村君、さっきお湯を霽しちゃって、それでズボンが濡れちゃったんだ。だから、漏らしたわけじゃないよ」

「……」

聡志のずれたフォローに明日香はしらーっとした目で昭利を見る。彼女の中ではズボンの濡れ具合イコールおもらしなのだろう。

「ふーん、おもらしじゃなくてお湯を零したのね。そういうことにしといてあげるわ」

「おい！ なんだよ、しといてあげるってよ！ 本当にこぼしたんだっての」

「はいはい、おしっこもあつたかいもんね」

「なんだよそれ！ ちよ、まてよ！！ あ、おい！」

抗議する昭利だが、明日香は聞き入れず、鞆を手にすると教室を出る。

「ちよ、まててくれよー、なんでそうなるんだよ……」

踏んだり蹴ったりな昭利は、その後も帰り道で必死の弁明を試みていた……。

3. 公民館

約束の土曜日、昭利は村の公民館へやって来た。

昼食を終えた参加者がわらわらと集まり始め、昭利の周りにも群がりはじめる。

「あきとしー、俺の前かけっこで一位とったぞー」

「そっか、やったな。練習したもんな」

「あたしね、テストで100点とったんだよー」

「へー、俺なんて50点だぞ。倍じゃん、倍」

普段の生活のことを楽しそうに話す彼らに、昭利は笑いながら答えていた。

公民館でのボランティア活動にちよくちよく顔を出す昭利は、鬼瓦校内外でも年下の子に親しまれていた。背は高いけれど笑顔が多いせいもあり、彼への覚えは良い。

「ねーねー、今日は何するの？ 鬼っこ？」

「鬼っこか？ そうだなあ……」

集まった子達を見てしばし考える。公民館にある登坂壁やロープウェイ、一輪車や竹馬を使って遊ぶのも考えたが、今日は比較的年齢層が高く、少し複雑なゲームができると考えた。

「皆、竹馬とか一輪車に乗れんの？」

「竹馬？ できるよ」

比較的高い子が竹馬を取ると、かっぽかっぽと歩き出す。走るには至らないが、十分な程度だった。

他の子が一輪車に乗ろうとしたが、こちらは巧く行かない。転んだ子が泣きそうになると、誰かがそれを起こし、「一輪車を器用に乗りこなす」

「よ、ほ、どうだ」

明日香だった。

今日はデニムのホットパンツと分厚いパーカーだった。彼女なりに運動しやすい恰好なのだろう。

「なんだよ、遅いじゃないか」

「笠原達と会って、来たいっていつから遅くなつて」

彼女の後ろには雄太と坂田広樹が居た。

「なんだ、珍しいな。二人が来るなんて」

「僕は別に……」

広樹はあまり乗り気でないらしく、無関心そうに周囲を見ていた。引き換え雄太は乗り気だった。彼は一輪車に跨っていたが、すぐにバランスを崩して転んで笑われていた。

「おーい、中村ー、沢森ー。お、坂田と笠原も来てたのか」

公民館から隆がやってくる。二人の他に広樹と雄太が居り、驚いていた。

「はい、二人だけじゃ心配なんで手伝いに来ました」

調子よく胸を張る雄太に明日香は唇を尖らせる。

「何よ。さつき一輪車で転んだのは誰かしら？」

「うっせーな、さつきのは悪い手本だ。本気出せば一輪車ぐらいできらー」

「ふーん、じゃあ、その腕前、見せてもらおうかしら？」

「ああ、やってやるよ」

珍しくヒートアップする雄太に隆は倉庫の鍵を取り出す。倉庫には一輪車や長縄跳び、その他の遊具がしまわれていた。

昭利としてはもう少し簡単なもので時間を過ごしたかったのだが、二人のいがみ合いに口出す隙が無く、その間も参加者達に早く遊んでとせがまれる。

「じゃあ今日はこの笠原大先生が一輪車のお手本をみせてくれまーす！」

公民館に集まった参加者を前に、明日香は雄太を大げさに紹介する。

「たく、こいつは……。えー、おほん、それじゃあ今日は一輪車を使って遊びたいと思います。最初は難しいと思いますが、僕のやり方を見て覚えてください」

「でも、この人、さつき転んでたー」

女の子の一人が雄太を指差して笑った。

「あれは悪いお手本だからマネしないように」

すかさず切り返す雄太にその場に居た人達は大きな声で笑っていた。

ひとまず練習として雄太は昭利の肩に掴まり、ゆっくりとバランスを取り漕いでいた。

「……こんな感じで二人ペアになってやれば、コツがつかめるようになるよ」

ふらふらしながら歩く様は乗れるというにはほど遠い。だが、その程度なら自分もできるのではないかと思わせられたらしく、掴まりながら一輪車に挑戦していた。

「うう、離れるなよ、いいな、離れんなよ……」

運動が苦手な雄太は昭利に必死に言い、よろよろ進んでいた。

「あはは、おにいちゃん、へたくそ〜」

それを見ていた子達が指さして笑うと、雄太は真っ赤になって反論しようと振り向く。バランスが悪い中で急な転回をしたせいでよろけてしまい、昭利を引っ張る形で倒れた。

「うっせー……」

「たく、このへたくそ……」

巻き添えをくった昭利は砂を払いながら立ち上がり、雄太から一輪車を奪う。

「もう、何してるのよ、二人とも」

無様な姿を見て明日香が腰に手を当てながら呆れた様子で言う。

砂を被った一輪車に跨ると、すすつとその場で回転したと思うと、前後に動きつつバランスを取る。

「おお……」

参加者たちは明日香の手際の良さを見て感心したらしく、皆口をそろえて明日香を称賛していた。

「うふふ、任せなさ〜」

「ねえねえ、お姉ちゃん、あたしにも教えて」

「僕も、僕も」

明日香を真似ようと一輪車を手に彼女の周りに集まる参加者たち。

「はいはい、順番ね……。あれ、一輪車が……」

群がる参加者たちに対し、一輪車が足りなかった。

「先生、一輪車が足りないんですけど」

「ああ、それじゃあ……。これを……」

隆は倉庫から別に一輪車を持ってくる。それは参加者たちが使うにはサドルの位置が高い。

「これは沢森が使って、今のを貸してやってくれ」

「は〜」

明日香は今乗っているのを貸し、背の高い一輪車に跨った。

「それじゃあ最初は友達に掴まりながらね。順番にね」

明日香の指導の中、参加者たちは一輪車に乗ろうと一生懸命だった。

「俺も俺も!」

雄太も負けじと一輪車の順番を待つ。面倒を見るはずが面倒を見られる側になる雄太に、昭利は苦笑いしてしまう。

「なんだよ、あいつ、なにしに來てるんだよ。木乃伊取りがって奴じゃん。馬鹿だろ」

「困った奴だなあ、遊びに來たわけじゃないのに。僕は一輪車できないし、他の人達はあつちの登坂壁で遊ばせようよ」

広樹は登坂壁を指差して言う。

「お、それいいな。それなら俺も得意分野だわ。先生、俺らあつちでやりますね」

「うん。お願いするよ。それじゃあ、僕は……」

ちらりと一輪車の方を見ると、転げまわる雄太が居る。

「一輪車の方を見てくださいよ。怪我しそうなのが一人居るしね……」

「お願いします」

昭利は参加者達を引き連れ、登坂壁へと向かった……。

公民館の登坂壁は傾斜が50度程度の坂になっている。高さ3メートル半程度で、側面には落下防止のフェンスがある。向い側はすべり台になっている。

坂には樹脂製の突起がいくつもあり、それを足場につまみ登る。他に登りやすいように綱が結ばれており、苦手な人はそれを頼りに登れるようになっている。



昭利ぐらになると樹脂製の突起を足場にひよいひよい登れるが、参加者には難しい人も
いるらしく、樹脂製の突起に掴まり、ゆっくりと登っていた。

「最初はその青いのを掴む。次に黄色を足場にして、今度は緑につかまるんだよ。そう
そう、したら右足をそっち、赤いのに乗っけて、さっきの青いのに乗るんだよ。おお、上
手だな。よし、そのまま登っていけ」

大人しそうな人に適宜指示を出し、ゆっくり着実に登らせる。昭利の助言を受けて遅いな
がらも頂上に手を掛けていた。

「よしよし、したらそのまま滑ってゴールだ」

「ありがとう、おにいちゃん！」

大人しかった人が笑顔になって昭利に手を振ると、歓声を上げながらすべり台を滑った。

「さ、次は誰だ？」

「じゃあ、あたしやろうかしら」

女が手を上げ、早速登ろうとする。その子は背が高く、昭利と同じぐらいある。
目立つ彼女。

服装もぴったりと身体のラインに沿ったワンピースで運動には不適當。色合いも地味で不
格好だが、スタイルの良さ、自信に満ち溢れた態度、垢ぬけた感じがあった。

普段の参加者に居た記憶が無いが、いつも同じ人が参加するわけでもなく、昭利も皆の顔
を覚えてはいるわけでもなく、そんなものかと気にしなかった。

「よしよし、それじゃあ、まずこっからだな。俺も横で登るから、一緒にな」

「ええ」

女は昭利の指示より早く、自分だけで登ろうとしてしまう。すると次の手が出せず、途中で止まってしまう。

「こつから先、どうすればいいの？ 教えなさいよ」

高飛車な彼女はまるで貴方のせいでこうなったという感じで睨む。

「一旦そつちに下がって、それからかな」

「ふーん」

言われた通りに一旦戻るも、今度は別の方に勝手に手を伸ばす。

「おいおい、待てよ」

慌てて隣へ行き、指さして次の取っ手を指示する。考えるより即行動という雰囲気の方は明日香に似ており、大股開きで登坂壁を登ろうとする。

「よしよし、上手……じょうず……」

彼女を見上げる恰好になり、ふと気づく。あつちにこつちに大股開きで動くものだから、短パンの間からちらちらと内側が見えそうになる。

濃いピンクの大人な雰囲気のあるフリル付きのパンティがねじれて食い込んでいた。

「……」

見てはいけないと思いつつも目が追ってしまう。

まるで催眠術にでもかかったように視線が縛られ、呼吸ができなくなる。彼女が「うんしょ」と言いながら足を上げる度にねじれるパンティ。色白な股間部の肌にこくりと唾を飲む。そこに黒い感じの不自然なもやを見た。

「次どうすればいいかしら？」

次の一手を決めかねた女が振り向き、昭利に尋ねる。

「ああ、次は……」

昭利は次の指示を出す……と自分に言い聞かせ、彼女の背後からゆっくり上る。

「そつちの緑のに掴まれば……」

黄色に足を置くしなくなる。そうなれば昭利の見上げる方向に女の子のお尻が来る。

「これね。よしよしこつ」

女子は言われた通りに動き、昭利の思惑通りに黄色い樹脂の突起に足を延ばした。

女の子の股が微妙に開き、脚を曲げる恰好で昭利の見上げる方向になる。

「よしし、もうちよつ……」

上を見上げると、さらにねじれてお尻に食い込んだパンティがあった。

近くに来てうつつらとした黒い霧の正体がわかった。陰毛だった。そのすぐちかくに肌色が濃くなった感じの何かが見える。そして線。光の加減で黒く見えた。

「よしよしこつ……」

最後の手すりに手を着いたとき、割れ目が横に引っ張られ、ピンク色の部分が見えた。

「……」

ただそれだけなのに、昭利は酷く興奮していた。

普段見ることのない女だけの部分がちらりと見えてしまった……、いや、自分から覗き見ようとしていた。

それがエッチなことなのだとわかっている。その証拠にチンポが大きくなっていった。

昭利は股間を弄り、勃起具合を隠す。ズボンの苦しさを感じながら昭利はゆっくりと登った。

「やっほー!!」

女は登坂壁の頂上で登山のような声を上げてはしゃいでいた。

「見た？」

「ああ。頑張ったな」

「違うわ」

「何が？」

女子は背伸びをすると昭利の耳元に口を近づける。

「あたしのパンツ」

「……!!」

女はクスッと嗤うと、そのまますべり台を滑って降りる。残された昭利は自分のスケベ心を見透かされたことを知り、恥かしさと後悔に呆然としていた……。

「おーい、昭利君、どうしたの?」

登坂壁の頂上でぼんやり座っていると広樹が声を掛けてきた。

「……ああ、すまん」

「さぼってる暇ないぞ。ほら、次の子行くぞ」

「ああ」

続いて男の子なら今度はおかしな気持ちも起こるまいと、すぐさま指示に向かう。

「よーし、そのまま、そのまま……よし、手を着いたか!」

「うん!」

「そんなじゃ、ふんばれ」

「はい!」

登りかけの参加者を押し上げようと背中中で足場になる。その人の手足と腕力ではやや厳しくあり、昭利が補助をしていた。

「よし、登れた」

「オーケー、上出来だ」

背中が軽くなったことでほっとする昭利。再び登坂壁に登って一息着く。すると、一輪車

の方が静かだった。

「ありやく、どうしたんだ？」

広場の方を見ると一輪車に乗れるようになった子達が自由に乘っているのが見える。その一方で雄太と明日香の姿が見えない。

「たく、さぼりやがったな」

雄太に呆れつつ、このまま参加者達を放っておくわけにもいかない。昭利は登坂壁を降りると、広場の方へと向かった。

「おーい、先生」

広場へ来た昭利に隆が顔を上げる。

「やあ、どうしたんだ？」

「なんか一輪車の方、皆が勝手に遊んでる感じだから、あっちの登坂壁とかでゲームした方がいんじゃないかって思っつて」

「ああ、そういうことか。どうも笠原が乗れないみたいで、もう少し小さいのが無いか沢森と一緒に倉庫に探しに行ってるんだ」

隆も気にしていたらしく、昭利の提案にほっとしていた。

「おーい、皆、登坂壁でリレーしようぜ。二チームに分かれて障害物競争な」

「はーい」

「なになに！俺もやるー」

「俺もー」

続く遊びが無かったことで飽き始めていた子は一輪車片手にこぞつてやってくる。

「それじゃあチーム分けするから、あっちで並んで……、おーい、明日香」

倉庫の方から明日香達がやってくるのを見て昭利は声を掛ける。

その姿にむっとしてしまう。

公民館で参加者の世話をするのが今日のボランティアの内容なのだ。それをせずにさぼっているのだから……。

怒りの理由をそう思い込みたかったが、実際には二人が寄り添っているのが原因だろう。

母の言葉が今も頭に引っかけかり、明日香が雄太と二人きりで居ることが妬ましかった。

「……ああ、昭利、どうかしたの？」

「どうかしたのじゃねーよ。なにさぼってるんだよ」

「ごめん」

「まあいいや。それよりなんかリレーとかしようと思うんだ」

「そう、じゃあ俺と明日香ちゃんで一輪車片付けてくるからよ。その間にリレーの内容を決めてよ」

「そんなの一人で行けよ。ほら、明日香、行くぞ」

昭利は俯く明日香の腕を取り引っ張った。

「ちよっと昭利……あ」

ふらつく明日香はそのまま昭利にもたれかかる格好になる。

「お、おい、明日香？」

抱きとめようと伸ばした手が彼女のおっぱいを鷲掴みにしてしまい、柔らかながらもハリのある感触を伝えてキモチイイ。

「……んっ！ あ！ え……あ」

驚いたのか、明日香もいつになく高い声で悶え、そのまま昭利にもたれかかる。

「大丈夫か？ どつか悪いのか？」

「……疲れたから、待って……て」

真っ赤な顔で少し涙ぐむ明日香は途切れながらそういう。熱でもあるのかと思ひ、覗き込もうとすると、はっとして顔を背ける。

「風邪でも引いたのなら医務室で休んでろよ」

「大丈夫だから……うん。大丈夫……」

明日香は一輪車に跨るのをやめると、ふらつきながら登坂壁の方へと歩く。

「なあ、大丈夫か？ほんと無理するなよな」

昭利は意外に思いつつ明日香の肩を掴む。

「ひん！」

甲高い声でびくりと震えると、明日香はそのまま座り込んでしまう。

「お、おい、俺そんなに強くしたつもりは……」

意外な反応に昭利は慌てて明日香にすり寄る。彼女はこくと頭を何度か頷かせたあと、大きく息を吸い、吐いた。

「ずう……はあ……」

そして顔を一度叩くと立ち上がる。

「よし、大丈夫。さ、いこっか」

「え。ああ」

急変する明日香の態度に訝しみつつ、いつもの通りに戻ったことにそれ以上とやかましくまいと着いて行くことにした……。

三つのグループに分かれて始まったリレー。

最初は広場を数人で普通のリレーを行い、続いて一輪車の子にバトンタッチ。次の子は登坂壁を登り、すべり台で滑る。最期に鬼瓦トネル（廃土管を繋げただけの代物）を通ってゴール。

「輪車の腕前に差が多いこと、足の速い子にばらつきがあるので、チーム分けが難しい。最終的な結果は僅差にならないと怒る子も出そうなので頭を悩ませる。」

「なんか良い方法ないか？ 手つなぎで走るとか？」

「二人三脚とかにする？」

「それいいけど、トンネル通るの無理じゃね？ ムカデ競争みたいにする？」

雄太が広樹の腰を掴み提案する。

「これならトンネル通れるじゃん」

さも名案とばかりに雄太が言うと、広樹も頷く。

「そうだね。僕もそれでいいと思うよ」

「思ったんだけど、トンネル潜ってる時にズルできるんじゃない？ だからさ、右足だけ結ぶ感じにしないか？ 手ぬぐいをちよつと長い感じで結んでさ」

「それならずるできないね。いいんじゃない？ それぐらいの方が調整しやすいし」

「チーム分けか。バランスよく分けたいから、俺と広樹は別の班な。明日香は……」

いつになく俯く明日香に昭利は心配になって彼女を見る。顔色は普通だけれど、脂汗が見え、唇辺りまで濡れているようだった。

「大丈夫。何でもないから」

不意に明日香はパーカーを短パンから出して股間を隠すように引つ張る。すると自然とおっぱいが強調されてしまう。昭利は思わず幼馴染の育った膨らみを見ようと前のめりになってしまう。すると彼女もそれに気づいたのか、隠すようにそっぽを向く。

「それじゃあ、雄太と俺と広樹のチームで三つだな……」

気まずくなった昭利は話題を進めようと早口でしゃべり始めた。

「このおにいちゃん、運動音痴だからやだー」

班に分かれることになったが、雄太の班になった子が不平を漏らす。

「負けるのやだー」

「輪車で雄太の運動音痴ぶりをみていた子達が文句を言うのだ。」

「うーん、なんか仕方ないな……。じゃあ、明日香の班ならどうだ？」

「いいよ。お姉ちゃん、輪車得意だもんね」

明日香なら運動が得意なこともあり、他の子達も文句が無さそうだった。

「ねえ、その子が輪車じゃ狡くない？ だって、皆に教えるぐらい巧いのよ？」
すると先ほどの女が口を挟む。

「言われてみればそうか。明日香、輪車じゃなく別のところで参加してくれよ」

「いいけど」

「じゃあ、貴女は最期のムカデ競争ね。トンネル潜るの。いいでしょ？」

「いいけど」

「決まりね。この子がムカデで良かったわね」

笑顔で昭利に言う女子に昭利は首を傾げる。

「こいつ、猿みたいにすばしっこいし」

「誰が猿よ！」

「ほら、キーキー言ってる」

そんなものだろうかと特に気にしていない昭利だが、女の子は笑顔で続ける。

「あたしの次はこの子のパンツが見れるかもしれないし」

「な！」

「おい！」

彼女の言葉に昭利と明日香は真っ赤になる。

「へ、変なこと言うなよな。俺は別に……って、明日香、誤解だつて、俺はそんなつもり！」

「このスケベ！！ へんたーい！！！」

明日香の平手が昭利の頬でパチンと良い音を立てた……。

4. 暗がりの中で……。

「それじゃ、位置について……」

頬を赤くした昭利はリレー走者を前に合図する。

「よーい、どんー!」

合図に一齐に走り出す参加者達。広場を駆け出し、向こう側でバトンを渡して戻って来る。それを二回続けたら、今度は一輪車の人達が走る。そして続いて登坂壁へと向かう。

「……スケベ」

「だから……」

昭利は言いすが、明日香は聞く耳をもってくれない。原因の女はそんな様子を嗤っている。腹が立つ。

「そんなことよりさっさと準備したら? もうそろそろ登坂壁に行きそうよ?」

女は手ぬぐいを昭利に突きだすと、顎でグラウンドを走る人達を示す。

「わーつてるよ」

昭利は手ぬぐいを足に結ぼうとする。すると女が前に立ち、暗がりで見えにくい。

「そこに立つなよ。邪魔だつての」

「モグラ競争を考えたのは貴方達でしょ? 足を結ばないといけないわ」

「モグラじゃねーよ、ムカデだ。つていうか、なんでお前なんだよ」

いつの間にか同じ班でさらにペアにさせられていたことに昭利は抗議する。

「だって、しょうがないじゃない? あたし、こんなくだらない事でも負けるの嫌なの。

あの冴えない子と、運動音痴の子と貴方なら、選択肢は一つじゃなくて?」

常になら目線の彼女は公然と広樹と雄太をバカにする。さすがに友達をバカにされたことに腹を立てた昭利は、立ち上がり彼女に抗議する。

「おい、言い方つてもんがあるだろ。広樹と雄太に謝れよ」

「しょうがないじゃない。事実だもの。それよりもほら、早く結びなさいよ。パンツぐら
いなら見てもいいから」

「……な、誰がお前のパンツなんか……」

「見たでしょ?」

「……」

その件に関しては言い返せない昭利。下唇を噛みつつ、彼女の足に手ぬぐいをまく。

「……ん? これじゃだめじゃないか?」

「何が?」

「だって、お前が前になるじゃん」

「そうよ。当たり前じゃない。なんでアタシの前に立とうと思うの?」

「……」

性格が悪いとはこういうことを差すのだろうか? それともおかしいと言うべきか……。

昭利はあまりのことに言葉が見当たらず、黙り込んでしまう。

「ほら、さつきとしなさいよ。少しぐらいなら見てもいいから」

「……」

そう言うとき女は背を向ける。

タイトな締めまりのあるスカート部分は丈がそれほど長くなく、トンネルをくぐるのであれば当然見えてしまうだろう。昭利は不満がありつつ、見たい気持ちもあり、それが天秤にかかる。

「たく……」

登坂壁を滑る参加者が見えたところで逡巡する暇もない。昭利は手ぬぐいを手に取った。

*
*

トンネルを前に仁王立ちする女と、それに引付く形の昭利。

隣では広樹と別の子が足を結んでいる。当たりが柔らかい広樹は初めての参加にも関わらず受けが良かった。親し気に笑い合い、絶対に勝つと意気込むことも忘れない。

予定としては自分もそんな感じにしたかったのだが、相手はこの生意気な女。まだ来ない自分の出番に腕組みしながら眉間にしわを寄せていた。

「おききー」

最初に来たのは広樹の班の子だった。汗を見せながらバトンを手渡され、広樹は一番左のトンネルに入って行った。

土管のトンネル一つ回り7メートル。それが5つ程繋がっており、接続部がコーナーになって蛇のようになっていく。

中は暗いが、少し離れているつなぎ目から光が差しているので完全な暗闇にはならない。それでも足を手ぬぐいで結んでいる以上、やりづらだろう。現に先行したはずの広樹達はトンネルの中で「いて」だの「ゆっくり」「慎重に」と聞こえてきて、まだ最初の接続部にすら辿り着いていない。

「や」ときたわね」

登坂壁から滑り下りる子を見て女が言う。早速バトンを受け取りトンネルへ急いだ。

「……ん？」

隣では明日香が雄太の足に手ぬぐいを巻いている。本当なら明日香には別の競技に参加して欲しかった。それでも雄太が彼女の前に行くことに安堵する。もしかしたら雄太も明日香を狙っているかもしれないのだから……。

「何してるのよ。行くわよ」

もたつく昭利を急かそうと女が言う。

「うるさいな。わかってるよ」

「へへ、昭利の奴、尻に敷かれてんのな」

「な、誰が！　「輪車にも乗れないくせに言われたくねーな」

「お、言ったな！　つていうか、昭利、またその子のパンツ見るつもりだろ。スケベ」

「俺はそんなつもりねーよ！」

「嘘っけっつの」

「スケベ……」

「くう〜」

明日香に睨まれ、昭利は誤解を解くこともできず、仕方なくトンネルへ潜った。

トンネルの中を通るのはいつ以来だろう。ずっと昔は暗がりの中を通り抜けることが勇気を示す行為となっていたこともあり、躍起になって駆け抜けたが、身体も大きくなり始めたところではかばかしくなりやらなくなった。

ただ、今回はこれまでと条件が違う。

足首に手ぬぐいが巻かれており、それは前に行く女の足首に繋がっている。

彼女が前進すればそれに引っ張られ、かなりのゆとりをもっていたのに、四つん這いで移動するおかげで密着せざるを得ない。

目の前には彼女のお尻があり、暗がりながらぶりぶり振られるのがわかる。

「急ぎなさいよ」

急かされ、手ぬぐいが引かれる度に顔がお尻に突っ伏しそうになる。

昭利は邪念を払おうと視線を逸らしつつ、できるだけ急いで彼女に続いていた。

「……大丈夫。ゆつくりね。……リードしてるから抜かれないよ。……膝気を付けて」

最初の曲り角を迎えた時、前の方から声がした。

広樹が参加者をサポートしながら進んでいた。気が優しいだけでなく面倒見も良いのだと感心しつつ、曲り角のところまで一旦降りる。

右隣の土管を見るもまだ姿は見えない。雄太達は手間取っているのだろう。けれど女は一位が良いらしく、すぐ次の土管に入り、進んでいった。

「おいおい、急ぐなよ……」

昭利も続いて土管の中に入る。

「もたもたしてたら抜かれちゃうでしょ。あたしは負けるのが嫌なの」

傲慢な彼女は多少のコツを覚えたのか、最初より早いペースで移動する。

その分、お尻を大きく動かすものだから、だんだんとスカートが捲れ上がり、先ほど見せたパンティ姿を披露する。

「お、おい、そんなに急ぐと……」

注意しようとする昭利だが、言葉をつづけられない。もしいえば、またからかわれるとわかっているからだ。

「パンツぐらい見ればいいじゃない。減るものじゃないわ」

女も見られていることは承知のうえらしく、それで遠慮している昭利をバカにしたように言う。

「……」

女のおしりを追って這いずる情けない状況が昭利にとって不満だ。けれど、明日香と比べても大きくて丸みのあるそれを見てみると、視線が勝手に向かってしまう。

昔、誰かが女のスカートをめくって喜んでいたことを思いだす。当時の自分はせいぜいおならとうんこが出る部分としか思っておらず、何が楽しいのかわからなかった。

それが今は瞬きを我慢してでも見ようとしてしまう浅ましさがある。

どうしてそういう気持ち芽生えたのかわからないが、昭利は無言のまま、彼女のお尻を追っていた。

「ちよっと」

「わ！」

「あん」

急に立ち止まる女に昭利はそのままぶつかってしまう。

柔らかい彼女のお尻を顔で受ける。普段、明日香から香る甘い臭いよりもずっと濃い臭い。軽く鼻で呼吸しただけで、眩暈のような感覚に囚われ、身体が硬直していた。

「もう、スケベねえ。見ていいと言ったけど、触れなんて言っていないわ」

「お前が急に止まるからだろ」

「急って言うけどねえ、前を見ていたら曲り角だってわかるんじゃないかしら？ あたしのお尻にくぎ付けになってるから、そんなことになるのよ」

前の方を見ると明かりが左側から見えた。確かに昭利は女の尻に目がいつっており、本来なら気付くようなことなのに見過ごしていた。

「悪かったよ」

「エッチ」

「うるせえな」

「でも見てたんでしょ？ そういうのエッチっていうのよ。スケベくん」

「くう……」

言われる一方の昭利だが、凶星のために反論ができない。唇を噛みしめつつ、なんとか話を逸らせないか考える。

「それより急がなくていいのか？ 負けるの嫌なんだから」

「ええそうね。スケベくんにおしりを舐めまわされるのはもっと嫌だけど……」

「……」

「そこを曲がるから、ちよっと足を前に出してよ」

「ああ」

右足を彼女の方へ差し出し、自由に動けるようにさせる。彼女は服を気遣いながらゆつく

り曲がり、姿勢を戻す。

「さ、急ぐわよ」

「へいへい……」

「……………んっ」

「なんだよ」

「なにが？」

「だから、舌打ちしたろ？」

「してないわ」

「でも」

「してないっての。ほら、急ぐ」

「へいへい」

てつきり彼女の舌打ちだと思ったけれど、声質が違ったかもしれない。

これ以上、無駄に言い合いをしても何を言われるかわからないと、昭利は彼女に続いた。

3 つ目を迎えたところで広樹を抜いた。曲がる時に手ぬぐいが外れたらしく、つなぎ目のところで結び直している。

変なところで律儀な広樹を後目に、昭利達は先を急ぐ。

「このまま 一気に行くわ」

勝負事に熱くなる性格らしく、手ぬぐいがぐいぐい引っ張られる。

「そんな急ぐなつての」

引っ張られる手ぬぐいに昭利は片足立ちになり、絡みを戻そうとその場で一回転する。

ついでに右の穴を見ると、明日香が見えた。彼女たちもそろそろ迫ってきており、左隣では広樹達が土管に入ろうとしているのが見えた。

「急げ」

昭利もせめて負けたくないと言った女の子に続いた。

4 つ目の土管を必死に這いつくばる昭利。今度は彼女のお尻につっこまないように気を付けたながら周りを見る。

「……」

それでもやっぱり女の子のお尻が気になってしまう。先ほどからだんだんとチンポが固くなり、ズボンを変形させていた。それになんとか湿っぽい。まさか漏らしたのかと思いつつ、やきもきしながら続く。

「また曲り角……ほんとうにめんどくさいわね」

曲がり角を迎えて、昭利は先ほどと同じように足を差し出す。けれど、今度は曲がる角度が逆で、女の子も手間取っていた。

「ねえ、あなた少し前に進んでくれないかしら」

寝そべる恰好の昭利に女の子が提案する。

「通れないか？ 仕方ないな」

昭利は仰向けのまま、ゆっくり前に進む。

「これでいいか？」

「もつと前に来ないとあたしの足が出せないでしょ」

このまま進むと、彼女の下に潜り込む格好になるわけで、膨らんだ股間を見られかねない。昭利はさすがに焦るが、彼女も譲る気が無いらしい。

「さあ、早く」

「……」

おそろおそろ前に滑る昭利。四つん這いの彼女の下に入り込むと、彼女の股間が間近で見える位置になった。そして、彼女の視界に膨らんだ股間が入ったわけで……。

「なに勃起してるのよ。変態」

「……おしっこしたいだけだよ」

「嘘。それとも白いおしっこかしら？」

「白い？ なんだそれ」

「……知らないの？」

「なんのことだよ」

「そう。まあ、いいわ。しかし邪魔ね……。小さくしてよ」

「できねーよ」

「そうかしら？」

彼女はそう言うと、昭利の膨らんだ部分を弄り始める。

「ちよ、なにするんだよ」

突然触られたことで昭利は裏返った声を上げる。

「邪魔だからよ。しようがないでしょ？」

「邪魔って、触ったからって小さくなるわけじゃないだろ」

「そうかしら？ 小さくなるかもよ……」

女の子はズボン越しにぐりぐりとチンポをいじくりはじめる。

デニムのズボン越しにむりやりいじられるとじんじんと感じてしまう。

「お、おい、やめろって。痛い……」

「痛い？ 痛いだけ？」

改めて尋ねられると痛みなのだろうか？

ジンとした感覚は歩けれど、痛みと断言するものでもない。足がしびれた時に触ってみて、

痛みに似たジンジンした感覚を思い出す。ただ、それとも違うと思うのは、どこもなく気持ちよいような気がする。

「ちよ……ま……お前」

それを意識すると、ピクンとチンポが跳ねた。さらに女の子の手の圧力を受け、またも気持ちよさを感じてしまう。

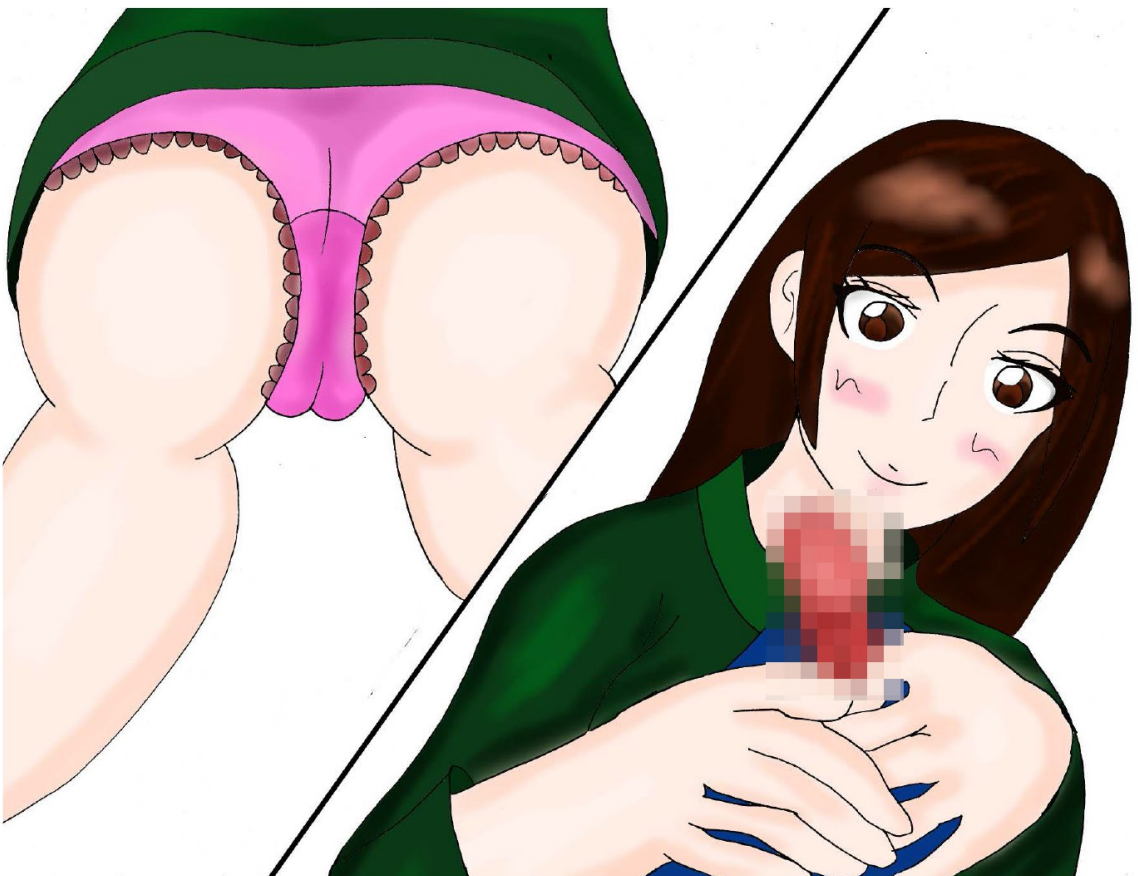
「うう……」

「どうかしたのかしら？ まったく邪魔ね。小さくならないなら、せめて邪魔にならない位置にしないといけないわね……」

女の子は先っぽをおさえ、ぐいっと右に曲げようとする。

「うう」

股間に強い刺激が加えられ、何か出そうになる。それを必死に抑えようとすると、自然と足がピンとなり、肛門の辺りから腰周り全体がきゅっと力む。



「なにそれ。だつち」

「やめるよ、やめ……」

反動を付けてぐいぐい右に回す女の子。左右にゆすられ、どんどん快感が高まっていく。

「うう……うう……」

無理やりおしっこを出させられるような感じになり、昭利は目を瞑って我慢する。鼻が詰まったようで、荒くふんふんと息をする。口は我慢できるよう食いしぼる。

「あら……こと」

すると顔に柔らかい感触が押し付けられる。

「むわ」

甘い臭いを濃くし過ぎた鼻を突く臭い。分類だけならくさいと思えたのだが、ラーメンの残り汁を飲みたいような感覚で、もう少し、あとちょっとだけ嗅いでみたくなる。

目の前には暗がりながら、ピンクのレースの布地があった。先ほどまでガン見していた魅惑のモノだ。

この布の奥には自分にあるものが無く、代わりに変な筋がある。昔、明日香と一緒にお風呂に入った時によく見たモノだ。その後は引っ張られて涙目になったけれど……。

「ごめんなさいね。ちよっと足が滑ったわ。っていうか、もしかして喜んでるとか？ 君、スケベくんだもんね」

「な、だれが……」

しゃべるとき、少し舌先が布地を舐めてしまった。

布の苦味に混じり、しょっぱいような感じがした。

「ああん……んっ」

「……あ」

「んもう……何してるのよ。本当に変態ね……」

それは彼女にも伝わったらしく、軽蔑して言い放つ。

「しょうがないだろ、お前が俺の顔にケツ乗せるから……」

「はいはい、そういうことにおいてあげましょうね」

そう言うと彼女は軽く腰を上げる。ピンクのの布地は遠ざかり、少し心がさみしくなる。だが、それを埋めるように、今度はチンポを左に曲げられる。先ほどよりは刺激が薄い、やはり気持ちよい。

「うっ……やめ……」

女の子の股間を顔で感じたせい、昭利は気の緩みがあった。その隙をつかれたらしく、何かを漏らす感覚を我慢できそうになかった……が、寸前のところで手が離れる。チンポの位置が邪魔にならなくなったのか、彼女は手を離してさっさと曲がり始める。

「ほら、ぼさっとしな」

「あ、ああ……」

物足りなさが残る。そんな切なさを抱えたまま、昭利はそのまま仰向けで進み、出口へと

辿り着く。

「ほら、降りるわよ」

「ああ」

明かりが見えたところでゆっくり降りる。

仰向けのままだからそれほど難は無いけれど、女の子は姿勢を崩してしまう。

「あ……」

手ぬぐいが互いを引っ張り合い、またも女の子のお尻が顔面に迫る。躲す暇も無く、ぐいすと顔が引つ張られ、押し付けられた。

「ああん……もう、さっきからエッチなんだから……」

急に猫なで声の甘えた言い方をする女の子。

「そんなにお尻が好きなの？ 君ってエッチだね。スケベくん」

「俺は別に……」

「アソコもおつきくしてさ……そんなにアタシが良いんだね。ま、あの子じゃお尻もおっぱいも小さいし、仕方ないかしら？」

「なっ！」

昭利はムキになって否定しようとしたが、開けた視界ではそれどころではない。

前を見ると、そこには明日香が居り、彼女は涙目で睨んでいた。

「バカ……」

「ちが、誤解だつての！」

言いかけて前に出ようとすると、女の子が邪魔をする。そのままつれて地面に倒れそうになった。せめて女の子を庇おうと抱きかかえる。

しりもちをつく昭利と、遠慮なく彼に倒れ込む女の子。今度は胸元が顔に来て、抱きしめられる恰好となった。

「あん、もう積極的なんだから……。今度はおっぱい？ うふふ、いいけど、あの子、す

ごい目で睨んでるわよ？」

「な、お前、ふざ……」

昭利は抗議の声を上げるが、明日香は雄太に背中を押されて土管へと消える。

「ま、ちよつと……！ おい、明日香！」

「ふふ……、ご機嫌ななめのようなね」

「誰のせいだよ……」

昭利はいらいらしつつこのふざけた状況を終わらせようと、最期の土管に女の子を促した。

5つ目の土管に入り、昭利は無言のまま、女の子を促していた。

「もう、そんなに怒ることないでしょ？ ちょっとぶざけただけじゃないの」「うるせえ。負けたくないんだろ。さっさと行けよ」

「そうねえ。それよりも、面白そうかしら？」

「？ からかっているのかよ」

「ごめんごめん。そんなにカリカリしないで」

「今更謝っても……」

許すつもりは無い。そう言いかけたところでまた立ち止まる女の子。

「さっきと同じよ。早く足出して」

「……」

昭利は仰向けになり、足を差し出す。そのまま彼女の下に潜り込み、顔を背け……たかった。

いらいらしつつも目は彼女のピンクの布地を見てしまう。先ほどから股間の収まりもついていない。自分の身体と心の乖離にもやもやしつつ、早く終わらせようと前に進む。

「そんなに怒らないですよ。お詫びに良いこととしてあげるから……」

「ん？ あ……」

今度はわざとだ。わざとお尻を昭利の顔におろした。

「むぐ、ちよ……」

「んふ……しゃべるとあそこを君の唇が弄るね。ちょっと感じちやうかも」

「な……」

「それより、うずくでしょ？ 」「ん」……」

「あ……」

左にしまわれたチンポをぐいっと右にもってこられる。またもあの痛みに似た快感が股間周りから広がり、昭利は齒を食いしぼる。

顔には女の子のお尻がぐいっと押し付けられ、濃すぎる女の子の匂いでくらくらする。

「やめ、やめろっと……あ……ちよ……くっ……」

ズボンの中で固くなるチンポ。先っぽを手のひらで押えられ、ぐりぐり回転させられ、どんどん気持ちよくさせられてしまう。

「あ、だめだ……やめてくれ……それ以上されると……俺……」

「うふふ、さっきのお詫びよ。あたしがしてあげるんだから、喜びなさいよ」

「してっつて、誰もそんなこと……いつて……うっ……」

太ももに生暖かいものがあてがわれる。そしてちゅっつと引っ張られる痛み。

「んふ……」

彼女が気怠い吐息を聞いた後、昭利は我慢ができず、ぴんとしたまま腰を前後にびくんびくんとさせていた。

「あっ、あっ……なんだ、これ……」

同時に身体に走る快感はこれまで体験したことのないモノだった。

ズボンの中が一気に湿っぽくなる。

「うう……あ……あ」

くいと押し付けられるお尻。唇をパクパクさせると、苦味としょっぱさが舌に触れる。女がおしっこをするとこころ。汚いイメージがあるのに、それでも舐めてみたくなっていた。もつと舌で味わってみたい。そんな気持ちが芽生え、昭利は自分が本当に変態になってしまったのかと困惑していた。

「あーあ、濡れちゃってる……。うふふ」

デニムの短パンの隙間から冷たいのが這い寄り、そしてブリーフの内側に触れた。

「おしっこじゃないわね」

女はそう言うと、ゆっくりと前進する。

「ま、まて……」

腰周りから力が入らない昭利だが、這いずりながら着いて行った……。

トンネルを抜けると、ゴールの方で呼ぶ声がある。みんなが待っている。

あそこへ行けば、このふざけたゲームも終わる。昭利はトクンとした痛みの走る腰周りを引く張り、ゴールを目指す。

「いちばーんー!」

ゴールを通った時、一人が拍手をしてくれた。

それに続いて広樹達がやって来る。

「にばーんー!」

広樹はパートナーの子を労いつつ、拍手に応えていた。

「はあはあ……よかった」

昭利はその場にしりもちをつくと、手ぬぐいを解く。

「……」

女の子は昭利に足を差し向け見下ろす。

「解きなさいよ」

「自分でやれよ」

「いいじゃないの。あたしの足に触れるチャンスよ」

「誰が」

「とにかく、早くしなさい。グズは嫌いなもの」

「……」

メンドクサイ奴だと思いつつ、これ以上喚かれても困ると、昭利は手ぬぐいを解く。

「あ、戻って来た」

言われて土管の方を見ると、ゆっくりと出てくる明日香が見えた。

「あーあ、やっぱりおのおにいちちゃん、運動音痴だ〜」

雄太のチームの子達はがっかりした様子で呟く。

「ほらほら、そう言ってるやいなよ。二人とも頑張ってたんだから」

昭利は宥めつつ、なかなかゴールへ来ない二人を訝しむ。

「おーい、早く来いよ。みんな待ってるぞ」

声をかけるも土管を出たところで明日香は立ち止まり、しゃがみ込む。

「どうしたんだ？ あいつ……」

「なんか顔が赤いわね。風邪かしら？」

言われてみれば明日香の調子が悪そうだった。顔が赤く、動作ものろく、ふらふらしている。ようやく立ち上がっても千鳥足で雄太に支えられていた。

「ふーん。変ね」

女の子は手ぬぐいがほどけたところで明日香の方へ行く。すると明日香は彼女に向かって大きく腕を振り上げた。

「お、おい」

なにやら不穏な空気だが、明日香はそのまま尻もちをつく。平手打ちしようとしていたのは見間違いだろうか？

女の子は明日香の足から手ぬぐいを解くと、雄太に何か指示しだす。

「おい、どうしたんだ……」

明日香を背負いながらやってくる雄太に昭利はふらつきながら問いかけた。

「なんか明日香ちゃん、気分悪いみたいなんだ。だから俺が医務室に連れてくよ」

「それなら俺が……」

昭利は前に出ようとしたが女の子に阻まれる。

「ダメよ。貴方だつてふらついているんだし、ボーイフレンドに任せなさいよ」

「どうして雄太が明日香のボーイフレンドなんだよ」

「だって、さっきからずっと一緒に仲良さそうじゃない？ 違う？」

「違うだろ。別に二人は……なあ、明日香」

昭利は明日香に水を向けるが、彼女はじろりと睨み、無言のままだ。

「明日香……」

「横恋慕はダメ。そうでなくてもアタシにエッチなことしてるの見られてるんだからね」

「それはお前が……」

「スケベ……」

明日香はぼそりと呟くのと、まだ腰周りのぼんやりした痛みのせいで追いかけることができなかつた。

「彼氏さんに連れてかれちゃったね」

「誰が彼氏だ……」

「さっきから二人とも、すごく楽しそうだったよ？ さっきの貴方みたいにエッチな声してたし……」

悩ましい声を耳元で囁かれると、再びチンポがぐっと力んでしまう。落ち込む昭利だが、それとは裏腹にチンポだけは大きくなってしまふ。鬱気味になり、昭利は広樹が来るまでしばらく蹲っていた。

「中倉さん、今日は楽しかった？」

「そうね。勝負にも勝てたし、いろいろ楽しいもの見れたから参加して良かったわ」

「……なんだよ、広樹、こいつ知ってるのか？」

「うん。彼女は去年に鬼瓦村に引越して来た子だよ。一組だね」

去年、都会から引越して来た一家があり、珍しく噂になった。

名前は中倉綾子。狭い村といえど違うクラスだと知らない人も多く、引越してきたとなるとさらにわからなかった。

本来なら彼女も自分達と同じく参加者を面倒見る立場なはずだが、なぜ一緒に遊ぶ側に回っていたのだろうか？

「さて、それじゃあ次は何をするのかしら？ あらあら、どこへ行く気？」

これ以上ここで綾子の相手をするつもりになれず、昭利は明日香を追って医務室へ行こうとしていた。

「医務室だよ。明日香が心配なんだ」

「そう。ならあたしも行くわ」

「……来なくていい」

綾子にからかわれていたことを知り、昭利は語気を荒げて唸る。

「いいじゃない。それに、女同士の方が話せることもあると思うわ」

「……」

「それよりも昭利君、ふらついてるじゃないか。ほら、僕が肩を貸すから掴まって」

「そうね、じゃああたしも肩を貸してあげようかしら……。ほら、あたしも一緒に行かないとだめじゃない」

「おい、離せよ……俺はいいに……」

「どうするっていうのさ。女の子相手になにかできるような昭利君じゃないでしょ」

女の子には優しい昭利の性格を知っている広樹はいつになく荒ぶる彼に驚きつつ無理に引く張る。

「うふふ。怖い怖い」

綾子はそれをからかうように嗤いつつ、公民館へと着いてくる。

広樹としても用があっても来ないでほしいのだが、それを制することもできず、一緒に向かった。

※体験版の為、割愛箇所があります。

5. 昨日と違う今日

月曜日の鬼瓦校はいつもと違う意味で行きづらかった。憂鬱というわけではない。むしろ、何か新しいことが始まりそうな気分。それは幼馴染のアイツと……。

けれど、足取りはまどろっこしい。

無意味に髪型をチェックしたり、歯をいつもより十分以上磨いたり、顔をこしこし拭いたり、何度もお茶を飲んでみたり……。

変に意識して緊張している自分が滑稽だった。

普段なら二人の家の中間点で明日香が来るのを待って登校するのだけれど、電話での会話のせいで顔が合わせづらい。

いつもより早くきてしまい、どこかへ隠れて様子を伺うこと数回、鬼瓦校へ行く子達に不思議そうに見られていた。

「……」

けれど、明日香は来ない。いつもなら朝の放送が響く前には来ているはずなのに……。

「遅いな……」

このままだと遅刻してしまう。昭利は仕方なく一人で学校へ行くことにした。

*
*

「おはよう」

三組の教室ではクラスメート達がいつもより遅い昭利を不思議そうに見ていた。しかも今日は明日香が居ない。普段なら階段を上がったところで口喧嘩を始めて教室に入る時には互いの顔を背け合うのが日常だったから。

「昭利君、おはよう。今日は遅かったね」

則武が彼を見て顔を上げる。彼は錦織満と一緒に来る。朝が弱い満のせいでいつも遅刻ギリギリなのだ。

「ああ。うん」

なんとなく肩透かしを受けたような気になりつつ、視線は明日香を探す。鞆はあるけれど、明日香はいない。

「なあ、明日香は？」

隣で友達とおしゃべりをしていた菱沼佳代に明日香が来ていないのか尋ねてみる。

「明日香？ さっき来たと思ったけど……あたしは見えないかな」

「あれ、昭利、そういえば今日って明日香と一緒にじゃなかったんだ。どうしたの？」
すると佳代とおしゃべりしていた井上美優が口を挟んできた。

「……一緒にじゃなかったの？」

「ええ、いつも一緒じゃん？ あ、もしかして付き合ってるのか？ とか？」
普段からゴシップ好きの噂好きの美優は相手をするのがメンドクサイ。

「そんなんじゃないよ。ただ、この前の公民館での時、なんか調子悪そうだったから気になってたんだよ」

「ふーん？ それだけ？ 怪しいなあ……」

じろじろと昭利を見る美優。佳代はそんな彼女を諷めるように「やめなよ」というけれど聞く耳をもたないらしい。

「沢森さんなら保健室じゃないかしら？」

すると窓際の席から涼しい声がした。御崎静香だった。

クラスどころか学年一、学校一の美少女と噂される彼女は、普段から人を寄せ付けない雰囲気がある。そのせい、彼女が話かけてきたことが意外過ぎて、何を言っているのかわからなかった。

「行かないの？」

「え？ ああ、うん、ありがと」

もう一度言われてようやく理解できた昭利は急いで教室を出た。

背後では美優が「やっぱり付き合ってるんじゃないの？」と楽しそうに笑っていた。

昭利は明日香がまた体調不良かもしれないと教室を出て保健室へと行く。

保健室には養護教諭の井沢元治が居る。どことなく頼りなさがあるけれど、いつも明るく笑顔の多い人で、安心できる存在だった。

「井沢先生、三組の中村ですけど、あす……沢森さん来てませんか？」

机で書類に目を通していた元治は昭利を見て顔を上げる。

「三組の中村君……ええと、昭利君か。沢森さんは……ええと明日香さん……」

彼は名簿を見ながらこめかみをトントンと叩く。噂によれば全校生徒の顔と名前を一致させようと常に名簿を見ているそうで、今も昭利の名前がずっと出ていた。

「ええと、今日は……、さつき一組の子が来てたかな？ あれは……、うん。一応、守秘

義務があるから用件とか教えられないけど、沢森さんは来てないよ」

「そうなんですか。わかりました。すみません」

守秘義務という言葉がよくわからなかったが、そういうものなのだろうと納得し、昭利は保健室を後にする。

校庭ではサッカーに興じる生徒達が居り、まだ少し時間に余裕がある。昭利は気分転換にサッカーに参加しようと校庭へ走った。

汗だくになり教室に戻ると、朝のホームルームが始まる直前だった。

昭利は急いで机に走るので思わず躓いてしまい、皆からくすくす笑われる。いつもなら明日香が「下ジなんだから」と嫌味の一言をくれるのだが、彼女の席には誰も居ない。

「はい、みんな席について……」

そうこうしている内に担任の隆がやってくる。

「起立、礼……」

クラス委員の二階堂博之の号令で椅子を引きずる音が響く。その音に紛れて教室の後ろのドアが開いた。

「……」

明日香が入って来ており、席へと向かう。

「明日香、どこ行ってたんだ？」

「保健室」

「え……」

「熱っぽくて」

「そう……」

嘘……だ。

それとも、昭利が保健室へ行った後に訪れたのかも……？

どうする？ 元治に尋ねるべきか？ だが、彼はきつとシユヒギムを盾に教えてくれないかもしれない。昭利にとつては知りたいことでも、明日香にとつて知られたくないこともある。だから教えてもらえないと思った。

なら、明日香が教えてくれるのか……？

なら、どうして嘘を？

「中村？ どうした。座らないのか」

「え？ あ、はい……」

ぼーっとしていた昭利は着席の合図を聞き逃しており、一人立ったままだった。

「すみません」

「寝ぼけるなんて珍しいな」

教室ではくすくす笑い声が起こるが、そこに明日香のものはない。彼女は俯いたまま、前を向いて座っているだけだった。

なんとなく変な気分だった。

授業中、明日香の様子を盗み見る昭利は頬杖をついて不機嫌そうな顔になる。

やはり体調が悪いのか、明日香は俯くことが多かった。

休み時間、話しかけようにも、彼女は彼に背を向け、トイレへ行ってしまふ。避けられているのかもしれない。

そう思うと、彼女が教室に戻って来た時、話しかけに行くことができなかつた。

話しかけられないまま昼食を終え、午後の体育の時間も上の空だつた。

走り幅跳びでラインを越えてしまい、鉄棒からは落っこちて、跳び箱では胸からぶつかるレントゲンと言われる失敗を披露した。

体中が痛む中、昭利は最期の走り高跳びの順番を待っていた。

それもこれも明日香の付いた嘘が原因だ。

「……昭利」

どうして保健室に行ったなどどうそを……？

考えれば考える程ドツポにはまる。

きっと次の高跳びも失敗するのではないだろうか？

「……昭利」

「なんだよ。うるさいな」

「あ、そんなこと言つていいのかな？ 人がせっかく心配してるのに」

「……明日香」

不調の連発に心配してくれたらしく、列からはみ出て声をかけてくれていた。



ただそれだけのことなのに、昭利の疑念に凝り固まっていた気持ちがほどけるような気がした。

「さっきからどうかしたの？ 風邪とか？」

「別にそんなんじゃないよ。猿も木からつてやつだ」

「うふふ、キーキーって言ってるんだね。昭利らしいね」

「それより明日香、お前さ、今日、本当に朝……」

「あ、ちよつとまつて……」

明日香がにじり寄り、顔を近づけて来る。

大きな瞳を開けてじっと見つめてくる。

少しでもバランスが崩れたらキスしてしまいそうな距離。こんな近くで明日香を見たことなどこれまでになかった気がする。そう思うと、急に胸が高鳴りだす。

「取れたかな……うん」

「なんだよ、何か……」

「さっきから昭利、へまばつかしてるじゃん？ 顔に砂着いてたよ」

「……うっせーな。ちよつと考え事してたんだよ」

明日香の事を考えていた。

そんな気持ちが裏返し、逆に聞きにくくなる。

「そ？ 昭利が悩むなんて珍しいね」

「……ら、そこ、無駄話はダメだぞ」

「あ、はい、すいませーん」

隆が笛を吹きながら注意すると明日香は元気よく返事をして戻っていく。

「あ、おい、明日香……」

「ん？ なに？」

なぜか呼び止めていた。本当はもう少し無駄話をしたいのに、それができない。けれど、何も用も無いでは済まされない。きつと「話したかったからでしょ？」とからかわれる。それが悔しい。凶星を刺されて……。

「お前こそ、ゴミついてるじゃん」

悔しくなつて適当に言い返すと、明日香は真っ赤になって体操着を直していた。

「んもう、あんたにはデリカシーつてのが無いの？」

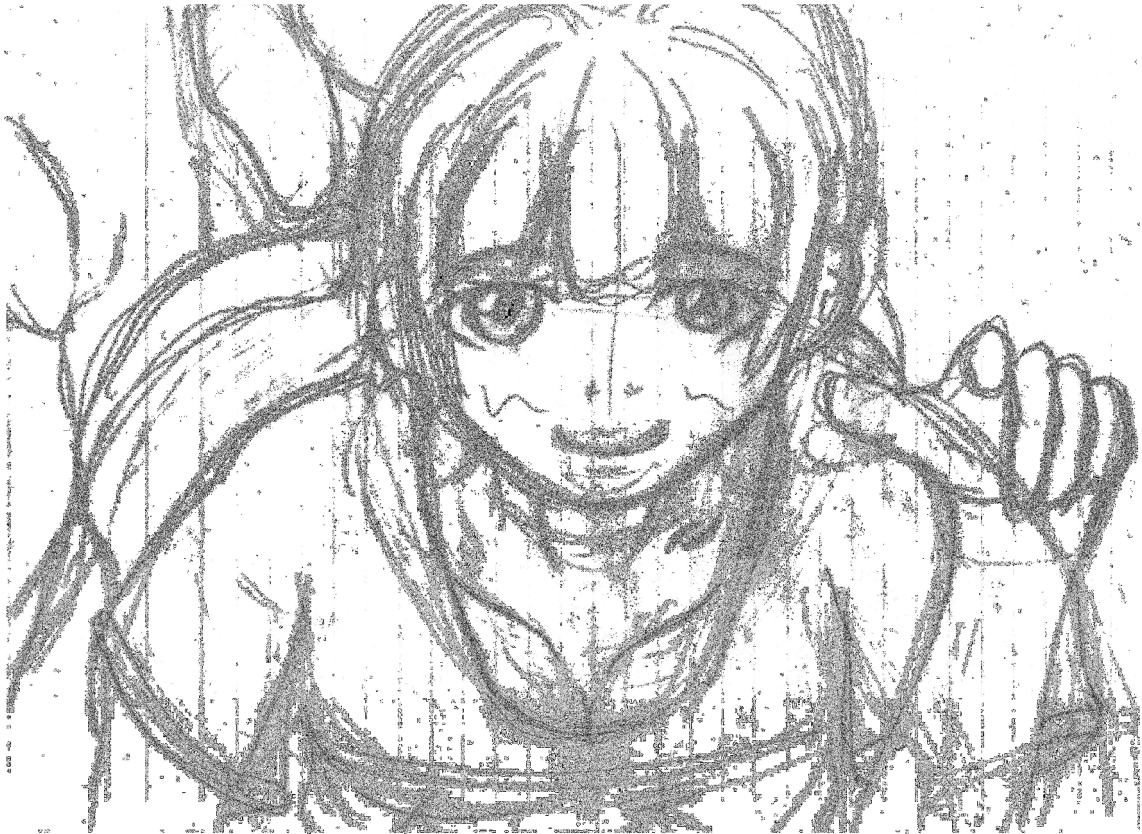
「お互い様だ」

「ふんだ」

また言い合い。

それでも少しは気が晴れたような気がする。

事実、高跳びは……。



放課後になって少し元気が出てきた昭利は、掃除の後のサッカーに参加せずに明日香を探していた。

明日香の今日の掃除は体育館だ。さぼり魔の吉川雄二が居るから時間が掛かるはず。手伝ってあげれば会話しやすいかもしれないと、昭利は足早に理科室へと向かう。

渡り廊下でゴミ拾いをしている明日香の姿が見えた。昭利は咄嗟に窓を開けて彼女に向かって手を振った。

「おい、明日香……」

最初こそ呼び止めるつもりで声を上げたが、だんだんと声に覇気がなくなる。もし引き止められなかったらと思い始め、そのまま見失いたい気持ちが芽生える。

「え、あ。おい、昭利」

そんな不安を払拭するように明日香は手を振り返してくれた。

「何か用？」

「別に」

「なんだよ、用が無いなら呼ぶなー、ひまじーん！」

いつもの辛口の後、ニコニコと笑って手を振ってくれた。

「なんだとー、ちょっと待ってるよー」

「ふふーんだ！ 30秒ね。それ以上待たないんだからー」

思わぬ時間指定に昭利は急いで窓を閉め、四階から落下するように階段を駆け下りる。

「わ、わ、わ……」

途中、他のクラスの子にぶつかりそうになり、踊り場で転げてしまう。

「おいおい、大丈夫か？」

隣のクラスのチビな奴が手を差し伸べてくれるが、そんな時間も惜しい。昭利は転げるように階段へと向かい、だだだと走っていった。

心臓がばくばくいいながらもなんとか渡り廊下へと辿り着く。体育館ではさぼってる人がバスケットボールで遊んでいるが、明日香の姿は見えない。

「なんだよ、待っててくれたっついいのに……」

昭利はがっくり肩を落しながらしやがみ込み、ため息をつく。

一旦休むと、どっと汗が噴き出す。シャツがべたつくのでひっぱり手で煽ぎ、どうしたものかと周囲を見る。すると突然目隠しされる。

「だーれだ」

声から明日香だとすぐにわかる。

「なんだ。明日香かよ」

できるだけ不機嫌そうに言ったつもりだ。けれど、語尾にいたるまでに浮っている。

「うふふ……、そんなにあたしに会いたかったんだ」

「そんなんじゃないよ。ただ、朝、保健室行ったから心配して……。また体調不良かと思っつわ」

「ん〜？ ああ、心配してくれてたんだ……。昭利は面倒見が良いからね。ありがと……」

目隠しが取れ、そのままおぶさるようになる明日香。

「おい……、俺汗かいてるから、あんまり引っ付くなよ」

「ええ？ いいじゃん、別に……」

嫌がる素振りを見せると逆にひつつこうとするあまのじゃく。

「ふふ、汗くさ〜」

からかうように昭利の髪の毛の生え際を撫でる明日香。きっと彼女は汗の臭いを感じているのだろう。逆に昭利は、彼女の甘い体臭と、少し酸っぱさのあるチーズのような臭いを嗅いでいた。

「明日香……」

背中におぶさる明日香。おっぱいの感触が伝わって来ると、意思とは無関係にチンポが大きくなる。昭利はそれがばれまいかどきどきしてしまう。

「で、なんの用？」

「だから、ちよっと心配になって……。それで話がしたくて」

「そっか……。ふーん。もしかして電話で言ったこと、真に受けちゃったとか？」

「え……」

「あんなの冗談だよ。ちよっとからかったら真っ赤になって、カワイイ」

「なんだよ、俺、本気で心配したんだぞ」

力強く昭利を締め上げる明日香だけれど、その分だけおっぱいも強く押し当てられる。

その感触が昭利の中で渦巻き、チンポがじゅんとした粘液を吐きだしてしまう。

「だって、「一緒に帰れなくてすねてるかな？ って思ってたね？ だから、ちよっと元気づ

けてあげようかなって思ってた好きって言ったの」

楽しそうに笑う明日香は昭利の知っているいつもの無邪気な幼馴染。

「へ、そんなのバレバレだったの。わかってたし、嘘だった」

「昭利さあ、あたしのこと、好き？」

「それは……またからかう気かよ……」

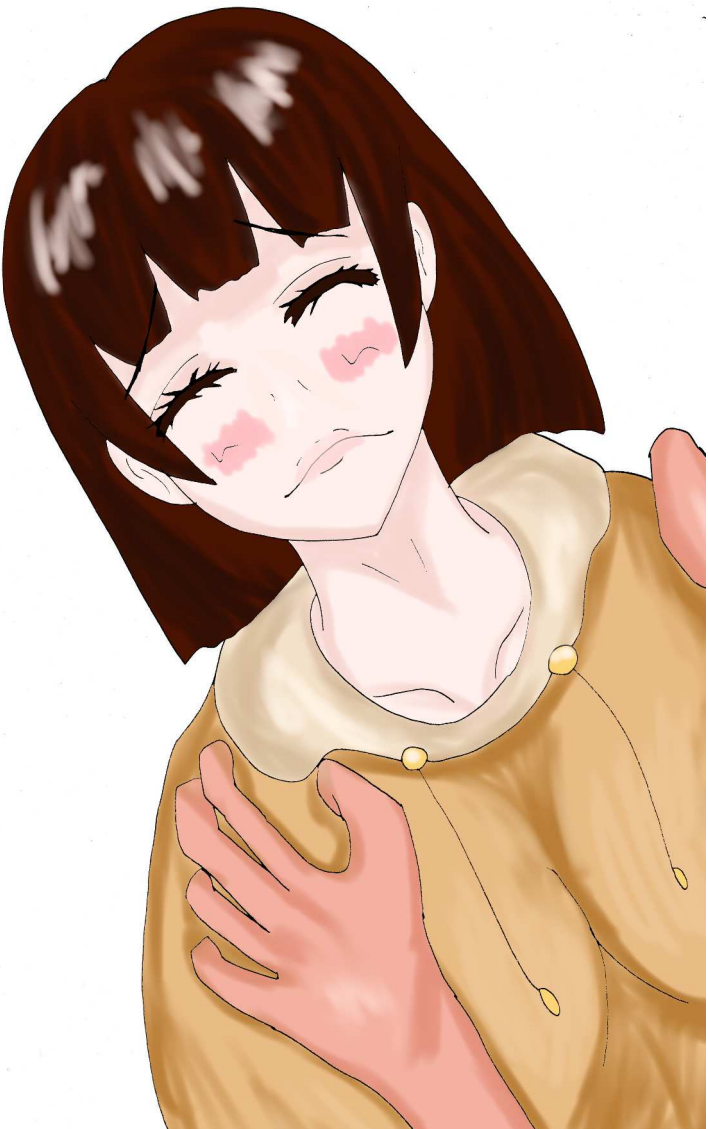
落胆したことを悟られまいと必死に強がったのに、畳みかけるように詰めて来られる。しやつくりでもしたかのような悲鳴を飲み込む。

「どっちだと思っつ？」

「……冗談だろ、どうせ。だって、あっちにもこっちにも誰かいるのに、そんなこと本気で言えるわけないじゃん」

気持ちが高まる。

今度は電話ではない。直接、目を見て、お互いの身体を通して伝えてくる明日香。



「誰か居たら、言えないと思う?」

「……怒るぞ」

怒れるだろうか?

「うふふ……」「めんね」

「けっ、なんでこう女はうそばっかしくんだよ。俺は心配したのに損したよ
できるはずがない。」

「そっか。じゃあさ、お詫びにキスしてあげよっか?」

「からかうなよ……」

しっこい。いい加減怒ったふりでもして誤魔化そうと思って振り返る。

「あ……」

ニコツと笑い首を傾げる明日香。明日香のはずが、どことなく雰囲気が違う。何が違うの
だろう。わからない。

「ね……しないの?」

目を瞑り、唇を待つ明日香。ボールは投げられた。それを受け止め、投げ返すか、投げ捨
てるのかは昭利次第。

「ん……」

目を瞑り、歯を軋ませ、唇を前出す。

怖い。明日香に触れることが怖かった。

キスしたい気持ちはあるのに、唇で触れたら、もう後戻りできない気がする。
だからだろうか、あと一歩踏み出せない。

「意気地なし……」

「俺は……」

言い返そうと思ったところで、唇に触れるものがあつた。

濡れている。固くて少し尖っている感じ。

これが明日香の唇……。これがキス……。

咄嗟の事で昭利は微動だにできなかった。

半開きの唇を割って入るモノがあつた。

閉じた前歯に触れると、探るように左右に動き、そして離れて行った。

「……へえ……」

第三者の声にパッと身体を離していた。

「昭利？」

「いめん……」

驚く明日香を余所に声の主を探した。

廊下に行くのは鬼瓦校一の美少女とされる御崎澄子。彼女は距離を狭めていた昭利と明日香を横目ながらしっかりと見ていた。

「んふ……ふう……んもう……昭利ったら……」

他の女を追うような昭利の態度に明日香はむっとした顔になっていた。

「だって、急にそんな……」

それだけ言うのがやっどだった。

「んもう、だらしななんだから」

明日香は苦笑しながら昭利を見る。

「しようがないだろ。御崎さん居たんだし」

「いたらどうだつてのよ？ いいじゃん、見られたつてさ。結婚式なら普通に皆の前でちゅーするんだよ」

「け、結婚つて……それは……」

結婚の二文字に互いに顔を真っ赤にさせる。明日香は自分の不用意な発言を誤魔化したいのか、目を逸らして指を振る。

「……つていうか、御崎さんつて、吉川君と付き合ってるつていうし、キスぐらい珍しくないんじゃない？」

「……そうなの？」

二重の意味で驚く昭利は明日香と澄子の後ろ姿を交互に見る。

深窓の令嬢ともてはやされる澄子はおっぱいこそまだまだ小さいけれど、しゃんとした背筋と質の良い黒髪、色白な肌と、赤い唇で他の女子とは少し違う存在だ。

吉岡雄二はクラスでも人気のイケメンでスポーツマンで金持ちな子。よく女の子と楽しく話しているのを見るので、キスぐらいと言われればその通りかもしれないと納得できた。

「そうなんだ」

「わかんないよ？ 見たわけじゃないし」

明日香は言い訳をくつつけるけれど、半ば確信しているようだ。こうして噂は作られるのだろうと思いつつ、もしかしたら二人のことも澄子によって噂に……なるとは思えない。彼女は友達がいなかったのかと疑える程、一人でいることが多い……、が、たまに誰かと一緒にいたような記憶もある。それは確か男だった。その声は許婚の浮ついた声とは違ったような……。

「さてと、じゃあ掃除に戻ろうかしらね。早くしないと明日になっちゃう」

「それなら俺、手伝うよ。そしたらすぐだろ」

「うん、ありがと……、あ、でもお、さっき澄子さんに見られちゃったもんね……。なんか恥ずかしいし、今日はいいよ」

「そうか……うん」

「ありがと。いつもいつも昭利あきとしくって頼るのも悪いしね」

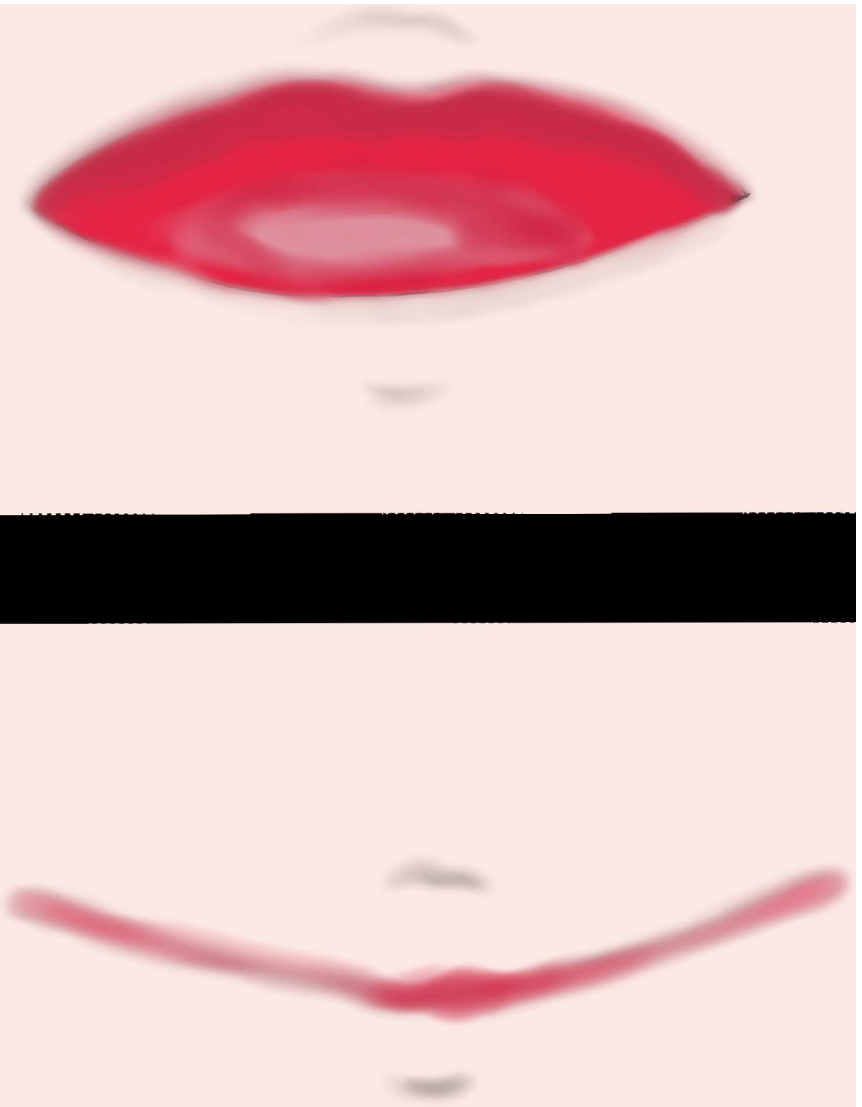
ニコリと笑う明日香を見て、昭利はようやく胸に溜まっていた不安が払拭されたようで、笑顔で頷くことができた。

明日香との初めてのキス。想像していた甘いものではなく、雰囲気醸したのではないけれど、初めてのそれは明日香との……。

「昭利！」

去り際に呼び止められる。

「なんだ？」



唇の動きはきつとスキと伝えてくれたはず。

咲き急ぐ蕾 中村昭利視点 完

※体験版の為、割愛箇所があります。